

札幌市立大学

教員研究紹介

2026



札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY

札幌市立大学

教員研究紹介

2026

札幌市立大学は、デザインと看護の2学部、2研究科、看護学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。また、2022年度にAITセンターを設置し、AIとITに関する研究、デザインと看護をAIが下支えする研究に取り組んでいます。

本冊子は産学官金連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の研究事例をご紹介することを目的に発行いたしました。札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。



札幌市立大学



にじゅう D×Nの学びで、20年。

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
1	都市・社会デザイン	教授	齊藤 雅也	札幌市円山動物園「オランウータンとボルネオの森」オランウータン母子の居場所と行動	1
2	都市・社会デザイン	教授	椎野 亜紀夫	樹葉の含水率による都市公園の防災機能評価	1
3	都市・社会デザイン	教授	森 朋子	非成長型都市計画の制度構造に関する研究—風景・景観の保全に向けて	2
4	都市・社会デザイン	教授	山田 信博	寒冷地住宅における窓の設置状況に関する研究	2
5	都市・社会デザイン	特任教授	遠藤 謙一良	建築×〔自然×地域性×身体性×合理性〕で快適な未来を創造する	3
6	都市・社会デザイン	特任教授	西川 忠	焼成した札幌軟石の物性変化に関する研究とその応用	3
7	都市・社会デザイン	准教授	大島 卓	環境“と”デザインする	4
8	都市・社会デザイン	准教授	金子 晋也	土着的な建築デザインに関する調査と実践	4
9	都市・社会デザイン	准教授	小林 重人	フレイル予防のためのアナログゲームの改変過程と社会的実装に関する研究	5
10	都市・社会デザイン	准教授	古俣 寛隆	森林と木材のよい利用の仕方	5
11	都市・社会デザイン	准教授	小宮 加容子	さわって楽しいあそびのデザインに関する研究	6
12	都市・社会デザイン	准教授	御手洗 洋蔵	緑の景観デザイン	6
13	都市・社会デザイン	特任准教授	吉田 修	寒冷地における高断熱住宅の「外の部屋」の活用	7
14	都市・社会デザイン	講師	石田 勝也	自然環境への回帰を促すメディアアート表現	7
15	都市・社会デザイン	講師	須之内 元洋	文化・歴史の継承のためのメディアデザイン	8
16	都市・社会デザイン	講師	藤沢 礼央	アート実践による地域文化との応答	8
17	都市・社会デザイン	助教	小西 信義	官民協働による流雪溝の利用活性化	9
18	情報デザイン	教授	藤木 淳	アートと連動した初等プログラミング教育教材の開発	9
19	情報デザイン	教授	石井 雅博	学習における行動変容を促すための画像生成 AI 活用法の研究	10
20	情報デザイン	教授	伊藤 健世	レストラン端末の音声 UI デザインの提案	10
21	情報デザイン	教授	柿山 浩一郎	札幌市の路面電車（低床車両）ラッピング広告の認知度向上	11
22	情報デザイン	教授	細谷 多聞	社会課題と教育をつなぐアートワーク	11
23	情報デザイン	教授	三谷 篤史	誰もが一緒に遊べるインクルーシブ遊具「ユールボード」を開発しています	12
24	情報デザイン	准教授	金 秀敬	感情と学びをつなぐ教育研究—嗅覚とデザインによる支援の探究	12
25	情報デザイン	准教授	福田 大年	テイスティング・スケッチ：味覚を描いて学び合う	13
26	情報デザイン	准教授	横溝 賢	「自分ということ」を手に関わりあう社会的デザイン	13
27	情報デザイン	講師	大淵 一博	業務効率化のためのハンズオン開催	14
28	情報デザイン	講師	松永 康佑	スペースコロニー空間におけるコリオリカを体験する VR コンテンツの研究	14

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
29	情報デザイン	助教	榎田 聡志	水素アシスト型ペロタクシー「PIONIE」の試作モデル制作・展示	15
30	情報デザイン	助教	矢久保 空遥	感覚のつながりから考える、人に寄り添うデザイン研究	15
31	情報デザイン	助教	吉田 彩乃	IT を活用した課題解決	16
32	情報デザイン	助教	渡部 大志	最適化によって現れる構造を探る	16
33	共通教育	教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	17
34	共通教育	准教授	並木 翔太郎	空間ナッジを用いた健康意識の可視化と食行動変容の促進	17

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
35	基礎看護学領域	教授	檜山 明子	医療施設での転倒予防看護と地域在住高齢者の転倒予防方略	18
36	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果	18
37	基礎看護学領域	准教授	武富 貴久子	「共に学ぶ」- 看護師の学習をサポートする取り組み -	19
38	基礎看護学領域	講師	中平 紗貴子	自己調整学習に関する研究	19
39	基礎看護学領域	講師	三戸部 純子	基礎看護技術動画教材の理解しやすい提示方法の検討	20
40	基礎看護学領域	助教	渋谷 友紀	看護学生のメンタルヘルス支援における Graphic Medicine の活用	20
41	基礎看護学領域	助教	本多 いづみ	安全性と生活機能維持を両立する看護技術の探究	21
42	基礎看護学領域	助教	吉田 実和	血圧測定技術に関する研究	21
43	看護管理学領域	教授	松野 千代美	知ろう！防ごう！心不全パンデミック in 桑園地区	22
44	看護管理学領域	准教授	鬼塚 美玲	寒冷・雪環境下の災害における看護技術の実践困難と工夫	22
45	看護管理学領域	助教	樋口 佳耶	制度・政策の変化は看護の現場をどう変えるのかータスク・シフト / シェアに着目してー	23
46	小児看護学領域	教授	奈良間 美保	こどもや家族と看護師の相互主体性に関する研究ーエピソード記述を用いた体験の振り返りー	23
47	小児看護学領域	准教授	加藤 依子	食物アレルギーのあるこどものための体験型学習プログラム	24
48	小児看護学領域	講師	牧田 靖子	母性・小児看護学領域における MPR 教材の開発ーアナフィラキシーに対するエピベン注射技術	24
49	母性看護学領域	教授	荒木 奈緒	胎児異常を診断された女性への助産師の支援	25
50	母性看護学領域	講師	石引 かずみ	女性が安心して自分らしく出産できるケアを目指してーWomen-centered care の視点からー	25
51	母性看護学領域	講師	岡 園代	超低出生体重児の出生直後の初期ケアプロセス	26
52	母性看護学領域	講師	小野澤 かおり	助産師による出生前検査の相談支援の実践に関する研究	26
53	母性看護学領域	講師	久保田 祥子	日本における Sexual Compliance の実態把握	27

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
54	母性看護学領域	助教	寺林 加菜子	出産方法の違いで、出産体験の受け止めはどう変わるのか	27
55	成人看護学領域	教授	菅原 美樹	二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシーに関する研究	28
56	成人看護学領域	教授	卯野木 健	ICU 後の長期メンタルヘルスの変化パターン	28
57	成人看護学領域	准教授	栗原 知己	集中治療 × データサイエンス × AI	29
58	成人看護学領域	准教授	高橋 奈美	慢性疾患とともに生きることを支える看護	29
59	成人看護学領域	准教授	牧野 夏子	重症外傷患者に対する看護教育の体系化に向けた取り組み	30
60	成人看護学領域	講師	工藤 京子	認知症マフの認知度アップと活動の定着化をはかる	30
61	成人看護学領域	助教	澤口 宙人	頭頸部がん患者の症状管理におけるデジタル技術の臨床応用	31
62	成人看護学領域	助教	平山 憲吾	薬物療法を受ける高齢患者および医療者の意思決定に関する研究	31
63	老年看護学領域	教授	貝谷 敏子	車いすアスリートチーム支援の取り組み	32
64	老年看護学領域	准教授	原井 美佳	認知症になっても住み続けることができる「わがまち桑園」の取り組み	32
65	老年看護学領域	助教	西川 めぐみ	腎臓移植レシピエント・ドナーが必要とする心理的支援の内容と評価	33
66	老年看護学領域	助教	松浦 有沙	脳卒中患者のアドバンス・ケア・プランニングに関する研究	33
67	精神保健看護学領域	准教授	石橋 佐枝子	オープンダイアログによる家族支援と次世代データ活用による包括的支援	34
68	精神保健看護学領域	准教授	守村 洋	メンタルヘルス、特に自殺予防に関する研究	34
69	精神保健看護学領域	特任助教	東谷 敬介	精神科リエゾンに関する研究	35
70	在宅看護学領域	教授	青柳 道子	終末期がん患者の望む生き方を支える看護師の対話力獲得過程に関する研究	35
71	在宅看護学領域	准教授	村川 奨	通院しながら自宅で暮らすがん患者さんを病院と地域の医療者が一緒に支える仕組みづくり	36
72	在宅看護学領域	特任講師	服部 裕子	①新卒（新人）訪問ナース育成支援に関する研究 ②独居高齢者のリロケーション (relocation) に関する研究	36
73	在宅看護学領域	助教	尾立 斗志世	成人前期に難病を発症した人の社会参加に関するレジリエンスの研究	37
74	地域看護学領域	教授	上田 泉	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の訪問看護におけるリスクコミュニケーション	37
75	地域看護学領域	教授	本田 光	あらゆる世代、健康状態、社会状態にある人々の“つながり”の重要性	38
76	地域看護学領域	准教授	市戸 優人	包括的性教育の推進に向けた“話し合う性教育”の提案	38
77	地域看護学領域	特任講師	松村 寛子	母親の授乳の希望（HOPE）を探る研究	39
78	地域看護学領域	助教	久司 周祐	「リーダー一人だけに頼らない、みんなで支え合う」地域組織における共有型リーダーシップの研究	39
79	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	地域医療と高齢者の健康支援に関する研究	40

3. AIT センター

No	職位	氏名	研究課題名	頁
80	教授	高橋 尚人	物体検出・物体追跡技術を用いた交通量調査プログラムの開発	40
81	特任教授	津田 一郎	カオス力学を基軸にした複雑系脳科学の研究	41
82	特任教授	橋田 浩一	パーソナル AI と知識グラフ	41
83	准教授	高橋 茶子	もっと楽しよう！ 少ない「答え」で賢く学ぶ「能動学習」の効率化	42
84	助教	岡崎 昌太	人工知能によるヘルスケア分野への応用研究	42

1. デザイン学部

齊藤 雅也

教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

SAITO Masaya

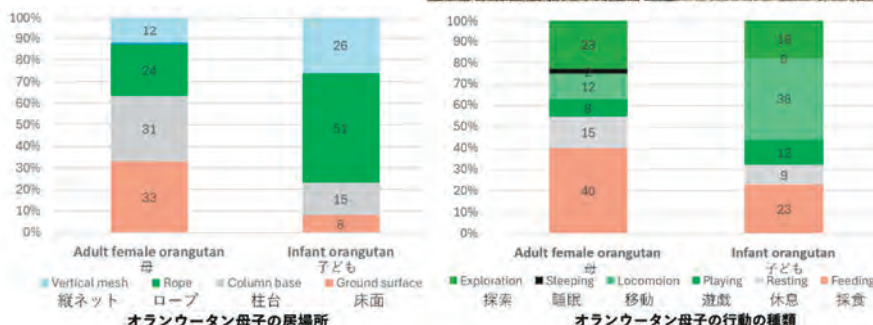
キーワード：円山動物園、オランウータン、母子、居場所、行動

札幌市円山動物園「オランウータンとボルネオの森」 オランウータン母子の居場所と行動

【研究の概要】

札幌市円山動物園「オランウータンとボルネオの森」において、筆者が設計監修した室内空間を対象に、冬季（2025年2月）の母子の居場所と行動を分析し、生息地であるボルネオ島の野生下に近い行動特性の再現可能性を検討した。

母は床面約3割、高所（柱台・ロープ・縦ネット）約7割。子は床面1割未満で、ロープ（51%）・縦ネット（26%）中心に移動・探索が卓越し、睡眠は確認されなかった。これらは、先行研究における野生下の幼少個体の高い探索性と母の存在による行動促進と整合し、樹上性と発達段階に応じた行動が示された。以上より、本施設的环境は野生下の行動特性の一部を反映している可能性が示唆される。



椎野 亜紀夫

教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

SHIINO Akio

キーワード：都市公園、防災、含水率、GIS

樹葉の含水率による都市公園の防災機能評価

【研究の概要】

樹体内に多量の水を含む樹木は、市街地火災発生時に延焼を抑止する効果が期待できるが、樹葉の含水率は樹種により異なることから、都市緑地に配置された樹種の構成により防災機能に差異が生ずる。本研究は、大通公園内に配置されている樹木の含水率に着目し、GIS（地理情報システム）による空間解析を通じて大通西1丁目～西12丁目の防災機能評価を行った。結果として、構成樹種別の含水率から見た丁目ごとの防災機能には一定の差異が認められた。

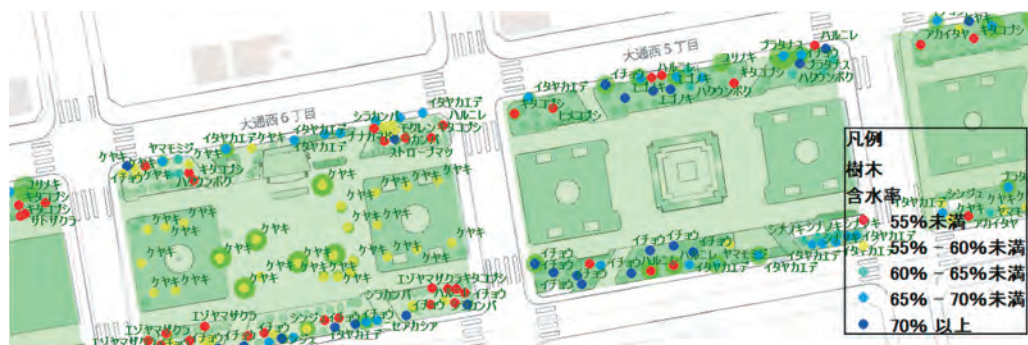


図 大通公園 樹種別含水率の空間分布

森 朋子

教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

MORI Tomoko

キーワード：都市デザイン、歴史的環境保全計画、都市計画、景観計画

非成長型都市計画の制度構造に関する研究—風景・景観の保全に向けて

【研究の概要】

バンフ国立公園は、1885 年に指定されたカナダ初の国立公園で、1984 年には世界自然遺産に登録され、年間約 450 万人を受け入れるカナダ有数の観光地です。ここでは、「生態系の健全性（Ecological Integrity）」を最上位の制度原理として都市計画に組み込むことで、都市規模の非成長が正当化され、その結果として景観がコントロールされています。

具体的には、ゾーニングによってパークサービスゾーン（バンフ町域）を固定し、ゾーン内部の商業床面積の上限を設定し、それらを法定化しています。これにより、都市規模が制度的に固定され、都市全体の規模そのものをあらかじめ確定する計画構造が成立しているのです。このバンフの事例は、従来の景観保全を目標に直接コントロールするものとは異なりますが、制度原理と都市構造を通じて間接的に景観を成立させる都市計画のあり方を示しています。

雄大な自然景観が広がる北海道には、従来の景観施策もある程度は有効と思いますが、バンフのような発想を持って、風景・自然景観を守る、北海道ならではの施策が必要だと考え、研究を進めています。



山田 信博

教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

YAMADA Nobuhiro

キーワード：寒冷地住宅、建築、設計、住まい

寒冷地住宅における窓の設置状況に関する研究

【研究の概要】

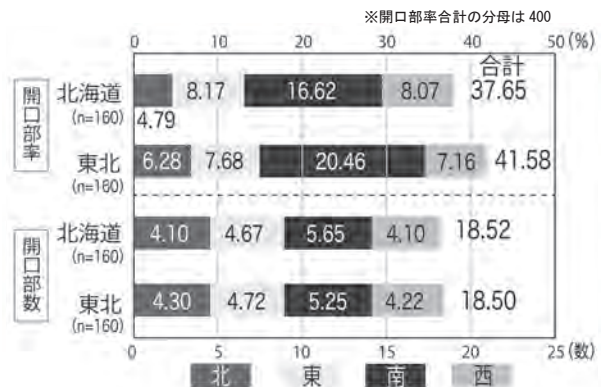
本研究では、寒冷地住宅の窓の設置状況について調査を行った。開口部率は、北海道で 37.65%、東北で 41.58%であった。釧路市が最も低く、秋田市が最も高い。開口部の数は同数で、開口部率は平均気温と関係性が見られ、気温が高い地域では窓が大きく、気温が低い地域では窓が小さくなる傾向が見られる。過去のデータと比較すると、窓の大きさは約半分に縮小している。



撮影日 2024 年 9 月 ©Google
(旭川市北面：開口部率 3.20%、開口部数 3)



抽出した写真と作成した立面図の一例



遠藤 謙一良

特任教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

ENDO Kenichiro

キーワード：新しい建築、空間、環境、地域、街、場所の創造

建築×〔自然×地域性×身体性×合理性〕で快適な未来を創造する

【研究の概要】建築の創造

建築計画にあたり諸条件を整理し、4つの視点から都市・建築の可能性を考察し、感性に響く唯一の建築・場所の創出について研究します。

1. 〔建築×自然〕

地球および地域の自然の豊かさを、科学的・生態的・気候的視点から学ぶ。

2. 〔建築×地域性〕

計画地の気候・風土・地形・周辺環境・資源・経済・産業・歴史・文化の視点から建築を考察し、魅力ある唯一の場所の創出について研究する。

3. 〔建築×身体性〕

人間が地域・街・場所・建築に対峙し、体感する事で感じる記憶やイメージを、哲学・文化人類学・記号学・脳科学・温熱環境などの視点から考察し、その未来や可能性を研究する。

4. 〔建築×合理性〕

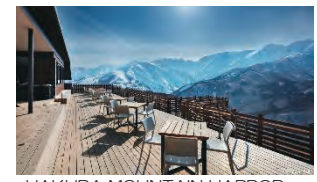
地域・街における建築・家具をサステナブルな視点で考える。また、木造の可能性、自然エネルギーの活用、建築技術・構法による快適な建築環境について考察する。さらにウォークアブルシティ・ウェルビーイングを学び、北海道・札幌における快適で心身に響く都市の可能性を考える。



らうす餐荘



洞爺湖 鶴雅リゾート 洗の舘



HAKUBA MOUNTAIN HARBOR

西川 忠

特任教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

NISHIKAWA Tadashi

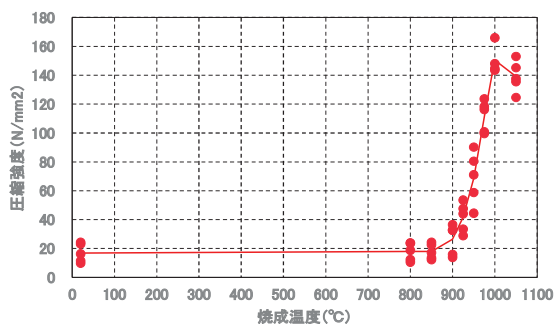
キーワード：建築構造デザイン、建築材料デザイン、臨床建築学、建築新技術

焼成した札幌軟石の物性変化に関する研究とその応用

【研究の概要】

札幌軟石（学術名：溶結凝灰岩）は北海道の開拓期から建築構造材料として使われ、現在でも蔵や倉庫などの歴史的建築物として残されています。現代でも建築の内外装として使われています。

札幌軟石は焼成すると、時に900～1000℃の間で色や物性が大きく変化します。焼成温度が高くなるにしたがい、赤味かがった色になり、1000℃超では暗赤色になります。また、焼成温度が高いほど収縮によって密度が大きくなり、それに伴い強度と固さが大きくなります。焼成温度により固さが変化することで、打撃したときの固有振動数（＝音階）も変わります。下の写真はこのことを利用して作成した「札幌軟石琴」です。



焼成温度と圧縮強度の関係



札幌軟石琴

大島 卓

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

OSHIMA Makoto

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、産業遺産の動態保全

環境“と”デザインする

【研究の概要】

landscape（ランドスケープ）の語源であるドイツ語の landschaft（ラントシャフト）は、「地域」を意味し、土地や地方といった意味も含まれています。人々の営み（文化的営為）によって示される地域的なまとまり、それが本来のラントシャフトといわれています。風景・景観といった環境の眺めを示す意味に留まらず、ランドスケープ概念が本来有していた「地域における土地と人々の営み」という多義的な捉え方で、私は「環境デザイン」を自身の研究分野としています。加えて環境デザインは「環境“を”デザインする」のではなく、「環境“と”デザインする」分野であるという視点のもと、地域に埋もれていると想定される未評価の地域資源の認識・評価・活用に向けたデザイン手法構築を目指し、研究・実践活動を行っています。



実践活動の一例（近隣小学校でのWS）

金子 晋也

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

KANEKO Shinya

キーワード：建築デザイン、空間デザイン、地域資源、土着

土着的な建築デザインに関する調査と実践

【研究の概要】

これまでの研究では、空間構成や建築構法の観点から、鯉漁家建築（日本海沿岸部）、昆布番屋（羅臼町）、一棟二戸（函館市）などの木造建築と、札幌市と小樽市で戦後の建築（近現代建築）を対象とした現地調査を行っており、北海道の建築文化の価値について考えています。近年では、札幌市の小学校の建築デザインに関する研究をすすめています。また、「石のまち」や「文化的・生態的景観」のように、他大学との共同研究や日本建築学会の委員会を通じて、まちづくりの基礎的な研究も行っています。



厚真町をフィールドとして、胆振東部地震で被災した地区のあり方を学術的な観点から提案した研究や、学生たちと DIY を行いながら空き家の活用を考える実践的な研究も行っています。DIY ワークショップでは、伝統的な漆喰壁や、厚真町の土を使った土壁を学生と施工しました。これらの研究を通じて、分析的な視点（調査）だけでなく、体験を通じた視点（実践）も得てきました。このような経験を、「DIY によるリデザインの実践と理論」（芸術工学会誌 92 号、2026）としてまとめ、デザイン理論の展開も試んでいます。



小林 重人

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

KOBAYASHI Shigeto

キーワード：ソーシャルデザイン、進化経済学、複雑系科学、
社会シミュレーション、知識科学

フレイル予防のためのアナログゲームの改変過程と社会的実装に関する研究

【研究の概要】

全国の高齢者サロン（通いの場）では、運営のマンネリ化や参加者の固定化が課題となっており、活動の縮小が懸念されています。その課題を解決するためのひとつの手段として、私たちは楽しみながらフレイル予防と社会的交流を促すことができる「地域すごろく」や「カード型のビンゴゲーム」を開発・配布してきました。

ですが、現場の高齢者サロンは年齢層や目的が多様なため、配布されたゲームが開発者の意図どおりに使われるとは限りません。本研究は、サロン運営者や支援者がゲームをどのように「改変」し、継続的に活用しているかを明らかにします。さらに、改変可能なルール要素や運営条件を整理することで、実践者が主体的に使いこなせる持続的なフレイル予防活動のデザイン原理を導出することを目指しています。

ゲームが地域の実情に合わせて「社会的に進化」していく過程を体系化し、どのサロンでも実践できる持続可能なフレイル予防活動のモデルを提示します。開発者による一過性の介入にとどまらず、地域に根ざした予防活動の基盤づくりに貢献することが期待されます。



古俣 寛隆

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

KOMATA Hirotaka

キーワード：ライフサイクルアセスメント、
森林・木材・木質材料・木質エネルギー、付加価値

森林と木材のよい利用の仕方

【研究の概要】

自然由来の木材は環境にやさしいと言われています。ところが、その根拠は？と聞かれると明確に答えられる人は少ないのではないのでしょうか。私は、製品やサービスの環境へのやさしさを評価する手法「ライフサイクルアセスメント（LCA）」を用いて、建築材料やエネルギーとしての木材の持つ環境優位性を数値で表す研究を行っています。LCAにより、例えば、国産と輸入建築材、木造と鉄骨造建築に関する温室効果ガス排出量を比較することができます。

さて、環境にやさしいことが分かったとして、実際に木材利用を進めるためには、経済的な視点が必要になります。つまり、どのくらい儲かるか、地域にどのくらいお金を落とせるのかなどです。これらの計算には、森林資源量、製造工場の規模、原料価格、需要量などの条件が必要になり、ステークホルダーとのディスカッションが欠かせません。

上記以外にも、様々な手法やシミュレーションを通じた課題解決の提案をしていきたいと考えています。



小宮 加容子

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

KOMIYA Kayoko

キーワード：あそびのデザイン、キッズデザイン、
ユニバーサルデザイン

さわって楽しいあそびのデザインに関する研究

【研究の概要】

南区アートシーズン春「はるのあしあと」の一環として、2025年6月14日（土）にまこまる（旧真駒内緑小学校）にて、さまざまな「さわる」を体験できるあそび「あとあそび」を企画・実施した。

あそび場は、床に白いマットを敷き、白い不織布の壁で囲った空間に、小さなビニール緩衝材を8,000個用意した。参加者はプロワーから出る風を使い、床に風の跡を残したり、ビニール緩衝材を一か所に集めたり、高く上空へ舞い上がらせたりするなど、風の流れを見ながら遊んでいた。そのほかにも、ビニール緩衝材でできた山に飛び込んだり潜ったりする姿や、自分自身の身体を使って風を起こす遊びも見られた。このあそびを通して、身体全体で風や緩衝材が優しく触れる感覚を楽しんでもらえたと考える。



御手洗 洋蔵

准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

MITARAI Yozo

キーワード：緑の街づくり、都市景観、緑の心理作用、地域振興

緑の景観デザイン

【研究の概要】

都市化の進行による効率的な社会の実現は、私たちの生活をとても豊かなものにしてくれています。情報化の発展もその一つです。その一方で、情報の過多によってストレスが増えていることも事実です。そのような中で、コンクリートジャングルと言われる都市の中に植物があることは、私たちの心を癒すとともに、街の景色に潤いをもたらしてくれます。また、街中の緑は、人と人とのコミュニケーションを生み出すきっかけになるなど、さまざまな効用を持っています。私は、こうした都市の緑が人々にどのように受け止められ、どのような役割を果たしているのかを明らかにするため、アンケート調査などを通じて人々の意識や評価を分析し、都市における緑のあり方や維持管理の方法について研究しています。



吉田 修

YOSHIDA Osamu

特任准教授 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

キーワード：建築設計、空間デザイン、寒冷地、環境調整行動、暮らし

寒冷地における高断熱住宅の「外の部屋」の活用

【研究の概要】

冬の居住快適性だけを考えれば、寒冷地の住宅は外部環境に対して閉じるのが一般的です。一方、北海道には冬以外にも素晴らしい季節があり、戸建て住宅では、外部環境との特別な接し方があるはずです。そこで、外皮（断熱・気密層）の外側に「外の部屋」を設け、それを高断熱の室内で囲うことによって、外部でありながら室内にはない、外の影響を受ける半屋外空間をつくりました。夏にBBQや農作業、冬に薪ストーブや食品・植物・道具の保管・室内に適さない作業など、夏と冬で生活様式が入れ替わる北国の暮らしに対応した、用途を限定しない余白の間です。

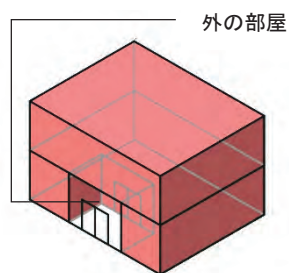
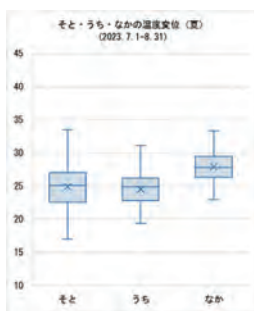


図. 高断熱で覆われた「外の部屋」



写真. 「外の部屋」の活用事例

図. そと・うち・なかの温度変位 (夏)

石田 勝也

ISHIDA Katsuya

講師 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

キーワード：メディアアート、環境情報、アートエンジニアリング、空間演出

自然環境への回帰を促すメディアアート表現

【研究の概要】

年々深刻化する地球環境の変化に対して、私たちはどのような感覚や姿勢を持つことができるのでしょうか。都市空間は快適で安全な環境として整備される一方、自然の変化を直接感じる機会を少なくしています。南極や北極の氷が溶けていること、干ばつによって湖が失われていることをニュースで知っていても、それを自分の生活と結びつけた出来事として実感することは容易ではありません。しかし、私たちは地球規模の大気や水、光、風の連関の外側にいるわけではありません。

私の研究は、こうした人と環境の関係を、メディアアートや空間演出の方法によって捉え直すことを目的としています。気象センサーなどで取得した風や光、温度といった環境情報を、音や映像、照明の変化として表現し、鑑賞者が環境の存在を身体的に感じ取るための作品制作と研究を行っています。SIAF ラボでの実践や、自身の作品《風音-かざね-》などを通じて、環境の変化を単なる情報ではなく、感覚や行動の変化を促す体験として提示することを試んでいます。



室蘭での作品展示風景

須之内 元洋

講師 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

SUNOUCHI Motohiro

キーワード：メディア・アーツ、アーカイブ・ウェブ情報学、
知覚情報学

文化・歴史の継承のためのメディアデザイン

【研究の概要】

デザイン・芸術・芸能・学術など様々な分野の歴史や文化資産を、現在に活かし・未来に継承していくためのメディアのデザイン、記録や表現を支える技芸の開発を行っています。

例えば近年、道内の芸術関係者らが主体となり、北海道の文化芸術活動の記録をデジタルアーカイブ化しようというボトムアップな活動「北海道芸術文化アーカイブセンター HACAC」が動き始めています。こうした活動をどのようにサポートすることができるのか。こうしたボトムアップなデジタルアーカイブを、どのようにしたら持続的な価値あるメディアにしていけるのか。これらの課題解決にむけて、デジタルアーカイブの技術的側面、法的側面、運営的側面からの試みを行っています。

(<https://hacac.jp/> 右図)。

その他、日本各地で展開されるアートプロジェクトのデジタル・アーカイブや、オンライン上の植物知識を集約・検索・活用できるシステムの開発、日本を代表する現代美術キュレーターの仕事をデータベース化し、共有・利活用を促進するデジタルアーカイブの設計・デザインも行っています。



藤沢 礼央

講師 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

FUJISAWA Reo

キーワード：アート、工芸、ものづくり、ワークショップ、
地域実践

アート実践による地域文化との応答

【研究の概要】

地域社会、地域教育の現場にアート体験を挿入することは、多角的な視点の獲得や多様な意見の受容、他者への尊重を育むための土壌づくりとなる可能性がある。ここでのアートとは生きる知恵や生きる技術というような人や人を取り巻く世界を捉える方法論として使用する。ではどのような形でアートを体験し得るのか。一つには作品鑑賞や芸術祭のような非日常的な出会いもあるが、私の研究では日常的な連続性と継続性に重点を置いた活動の中で、示唆的にアートの要素を盛り込む一方、体験者はアートとは気づかぬほど些細な体験を積み重ねていく。長期的な参与観察を行うことでそれら積み重ねによる変化が可視化され、慣習や慣例、強固なシステムがほぐれ、緩やかな構造の変化が確認できる。今後は参与観察の分析とアートがもたらした作用の普遍性やコミュニティの中で生きる汎用性を探っていく。



小西 信義

助教 デザイン学部（都市・社会デザインコース）

KONISHI Nobuyoshi

キーワード：文化人類学、雪氷学、コミュニティデザイン、
積雪寒冷地の暮らし、官民協働

官民協働による流雪溝の利用活性化

【研究の概要】

積雪寒冷地の暮らしにおいて、雪処理は必要不可欠な作業です。流雪溝とは、道路の下に水路を設け、そこに河川水などを流すことで、道路除雪によって発生した雪を河川まで搬送し、日々の雪かきを助けてくれる便利な冬のインフラです。しかし現在、過疎高齢化や住民のライフスタイルの変化に伴い、投雪作業の担い手は年々減少し、住民の負担感は増大しています。その結果、投雪が行き届かず、残存した雪山による視程障害や歩道の寸断など、交通障害を招く事例も見られます。

私の調査研究フィールドである北海道苫前町では、流雪溝をめぐる課題解決に向けた町内有志の取り組みが盛んで、これまでその実践を記述してきました。彼らはさまざまな活動を通して、官民協働によってそれぞれの力を持ち寄り、課題を解決する場をつくったり、一斉投雪作業を企画したり、流雪溝の利用ルールを変更したりしてきました。そして、流雪溝を機能させるには、地域コミュニティの基盤づくりが最優先であり、それを「インフラのインフラ」と端的に表現しています。

このような実践を参与観察することで、積雪寒冷地の暮らしにおける課題解決のあり方や、その過程におけるインフラの意義や老朽化するインフラの維持管理の在り方、官民協働を推進する上でのヒントを探っています。



藤木 淳

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

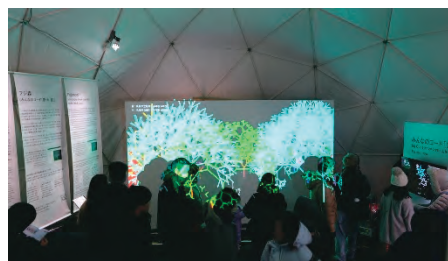
FUJIKI Jun

キーワード：メディアアート、STEAM 教育、地域アート

アートと連動した初等プログラミング教育教材の開発

【研究の概要】

近年 STEAM 教育が推進されています。このような現状を踏まえて、アートと連動した初等プログラミング教材を開発し出前授業で実践しています。具体的には、札幌国際芸術祭 SIAF スクール事業を通して、プログラミングでオリジナルの雪の結晶や星、木の図形が作れる WEB アプリを開発し、この WEB アプリを使って札幌市内の小中学校で授業を実施しています。また、その成果として受講生の作品をひとつのアート作品にまとめ上げ、札幌国際芸術祭 2024、札幌国際芸術祭イベント 2025、2026 において発表してきました。アンケート結果から、プログラミングは少し難しいが、楽しく受講でき、受講後はアートやプログラミングに対する興味・関心が向上したことを確認しました。これらの一連の活動は第 18、19 回キッズデザイン賞を受賞しました。



石井 雅博

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

ISHII Masahiro

キーワード：画像生成 AI、行動変容、ディープラーニング

学習における行動変容を促すための画像生成 AI 活用法の研究

【研究の概要】

膨大な画像データをコンピューターに学習させ、指定する条件から新しい画像を自動生成する技術は画像生成 AI と呼ばれる。ディープラーニング（深層学習）の応用である画像生成 AI は、商品画像やバナー制作などの広告・マーケティング、キャラクターや背景生成などのエンターテインメント、医療分野における画像補完やシミュレーション、インテリア・建築分野におけるリフォーム提案などに活用され始めている。画像生成 AI を用いると、人物の顔、声や動作を本物のように生成することも可能である。この技術は社会的な脅威と見なされることもあるが、エンターテインメントやヘルスケアなどの分野で肯定的な方法でも応用が検討され始めている。例えば、歴史上の人物や架空のキャラクターを通して学ぶことができるシステムが提案されている。AI が生成した画家ダリが来場者と交流し、彼の作品について語るダリ展などがある。本研究では、画像生成 AI を用いて、人々に学習における行動変容を促すための研究を行っている。



オンデマンド講義を
AI クラスメイトと受講

伊藤 健世

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

ITO Kensei

キーワード：ユーザーエクスペリエンスデザイン、感性工学、心理学、音声ユーザーインタフェース

レストラン端末の音声 UI デザインの提案

【研究の概要】

この研究は、声で操作する仕組み（VUI）をより使いやすくすることを目的としています。日本では ATM やセルフレジなどで音声案内が使われてきましたが、人前で話す恥ずかしさや情報漏れの不安から、音声入力はまだあまり利用されていません。一方で、音声操作に慣れている人ほど抵抗が少ないことも分かりました。

そこで、レストランの注文端末に会話できる音声機能を導入し、「タッチ」「音声で注文」「音声で検索」の3つの方法を用意しました。また、親しみやすい声やキャラクターを使い、話しやすさも工夫しました。

実験の結果、分かりやすさはタッチ操作が高評価でしたが、魅力や使いたい気持ちは音声検索が優れていました。今後はタッチを中心に、音声を補助として組み合わせることが重要だと考えられます。



柿山 浩一郎

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

KAKIYAMA Koichiro

キーワード：景観配慮広告、デザインコンテスト設計・運用

札幌市の路面電車（低床車両）ラッピング広告の認知度向上

【研究の概要】

2024年3月に札幌市電の新型低床車両「シリウス」のラッピング広告販売が始まったが、2025年5月時点で運行は1台にとどまり、広告商品としての訴求力に課題がみられた。そこで本研究室は、販売促進と広告商品としての魅力向上を目的に「モノクロラッピングコンテスト」を企画・運営・審査した。

企画では、低床車両ラッピングが話題性を持つ一方、費用やデザイン自由度に課題があると整理し、車両本来の「白・黒・白」の三層イメージと札幌らしいシンプルさを重視するコンテストとした。企業向け・一般向けの二段階で募集し、企業向けには4社11案、一般向けには36案の応募があった。

審査では、「白・黒・白」の三層構成との親和性、白の使用量、文字・イラストの配置に加え、「自然豊かな札幌」「国際観光都市札幌」などといった減点要素・加点要素の整理を行った。成果として、2025年8月末からウエスティン ルスツリゾート車両が運行を開始し、2026年1～2月には一般向けコンテスト受賞作品を展示するギャラリー電車が運行された。



細谷 多聞

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

HOSOYA Tamon

キーワード：SDGs、環境教育、フロッタージュ、ワークショップ企画、作品制作／展示

社会課題と教育をつなぐアートワーク

【研究の概要】

デザインやアートの作品が媒介となり、自然現象やさまざまな社会問題を体感できるキッズデザイン試みを続けている。2025年度はダンロップタイヤ北海道カンパニーと共同で、廃タイヤの不法投棄に起因する環境問題を、子どもたちと一緒に考えるワークショップ／作品制作を実施した。市内の小学校の図工の時間に、子どもたちに廃タイヤのフロッタージュ作品づくりに取り組んでもらい、後日、これらを貼り込んだ大きなカエル（タイヤカエル）の作品に転じ、札幌市役所のエントランスホールに展示した。今回の試みでは、問題に対する子どもの好奇心を、一過性の体験とするのではなく、ものがたりや時間、関係団体相互の利益といった、大きな枠組みを活用しながら設計に取り組んだものである。研究の成果は、今後、さまざまな種類のワークショップ／作品制作の企画実施に役立てられる。



三谷 篤史

教授 デザイン学部（情報デザインコース）

MITANI Atsushi

キーワード：木製遊具、産学連携、地域貢献、
インクルーシブデザイン、プロダクトデザイン

誰もが一緒に遊べるインクルーシブ遊具「ユールボード」を開発しています

【研究の概要】

ヨーロッパ発祥の遊具を北海道の地域性を活用したイノベーションにより、新たな遊具「ユールボード」を開発しました。これは、2本のひもを引っ張ることで、ひもに繋がれたリングを操作し、リングに搭載されたボールを所定の穴まで運ぶ遊具です。ひもを引っ張るだけで誰でも遊べることから、「インクルーシブ遊具」として展開しています。これまで、遊具性を高めたユールボードを開発し、北海道蚤の市や札幌市青少年科学館でのイベントなど様々な場所で出展してきましたが、遊具を見た医療関係者から、ADHD（発達性協調運動障害）の訓練に使えるのではないかとコメントをいただいたため、今後はトレーニング用ユールボードの開発も行っていく予定です。遊具としての楽しさを失わずにトレーニング器具としての特性をどのように持たせるか、今後検討していきます。



金 秀敬

准教授 デザイン学部（情報デザインコース）

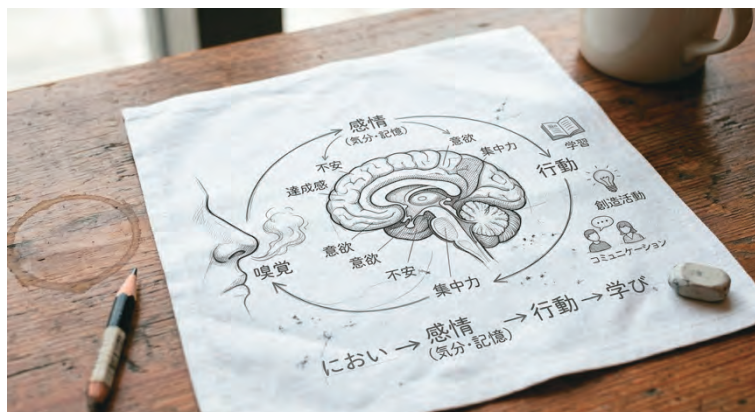
KIM SuKyoung

キーワード：エモーション (Emotions)、マルチモダリティ
(Multimodality)、エクスペリエンス (Experience)

感情と学びをつなぐ教育研究—嗅覚とデザインによる支援の探究

【研究の概要】

近年の大学教育では、学生の「学ぶ意欲が続かない」「授業に積極的に関われない」といった課題が広く見られ、特にコロナ禍以降、その傾向は一層顕著になっています。私は、この背景にある「人の感情（情動）」に注目した研究を行っています。学習は知識の理解だけでなく、不安や達成感といった感情に大きく左右されます。たとえば、内容を理解していても緊張のために発表できない、努力しても達成感を得られず意欲が続かないといった状況は、多くの学習者に共通する課題です。こうした点を踏まえ、本研究では「感情」という視点から学びを捉え直し、特に気分や記憶と密接に関わる嗅覚に着目しています。においが集中力や行動に与える影響を多角的に測定・分析し、その知見をもとに、学習者が自らの感情に気づき、より良い学びにつなげる教育支援の仕組みの構築を目指しています。



福田 大年

准教授 デザイン学部（情報デザインコース）

FUKUDA Hirotoshi

キーワード：テイスティング、スケッチ、環世界、対話型鑑賞

テイスティング・スケッチ：味覚を描いて学び合う

【研究の概要】

現在、北海道ワイン事業者との連携研究に経営学の研究者らと携わっています。ワインの味・香りを追求する方々との協働で、私が注目したのは「美味しい」の捉え方の違いでした。そこで、ワインの味の感覚的印象を、主体ごとに異なる「環世界[Uexküll, J. von & Kriszat, G. 1934]」と捉えて、その相互理解を促す方法「テイスティング・スケッチ」を考案・試行しました。対象は専門知識を前提としないアマチュアによる娯楽としてのテイスティングとして、言語表現に依存しがちな従来の評価方法の限界を補うことを目指しました。テイスティング・スケッチでは、参加者がワインを試飲した後、味の印象をハガキサイズの紙に自由にスケッチします。描画後、参加者は自作のスケッチを提示し、味の印象や描画意図を説明しながら対話を行います。全員の発表を経て、試飲したワインの印象に最も近いスケッチを参加者全員で選定し、最後にファシリテータが葡萄品種や産地、製造方法などの専門情報を共有します。この一連の流れをワインごとに繰り返します。複数回の試行の結果、同一ワインであってもスケッチはすべて異なり、参加者同士が共通点や相違点を探りながら、自他の環世界を相互に学習する様子が確認されました。今後は、市民向けワークショップに展開することも検討していきます。



図 テイスティング・スケッチ試行の様子とスケッチ例

横溝 賢

准教授 デザイン学部（情報デザインコース）

YOKOMIZO ken

キーワード：学びのドーナツ理論、大人の学び、
二人称的アプローチ、共同注視

「自分ということ」を手に関わりあう社会的デザイン

【研究の概要】

「大人の学び」は、知識を得ることだけでなく、自分の経験を見つめ直し、他者や社会との関わりの中で新たな意味を見出していく営みです。本研究では、地域の高齢者とともに表現活動や対話の場をつくり、それぞれの人生の記憶や感覚を可視化し、共有する実践を行っています。こうした学びの場では、教える・教わる関係を越えて、互いの経験に触れ合いながら新たな関係が生まれます。大人の学びとは、他者との関係の中で自分を更新し続ける、生き方そのものをデザインするプロセスであると考えています。



大淵 一博

講師 デザイン学部（情報デザインコース）

OHBUCHI Kazuhiro

キーワード：業務効率化、DX、RPA

業務効率化のためのハンズオン開催

【研究の概要】

札幌市立大学情報基盤センター長として、おもに事務職員の業務を効率化するためのハンズオン（講習会）を開催しています。大学としてDX（デジタルトランスフォーメーション）を行うべく、書類のデジタル化、手続きの自動化などをサポートしています。手続きの自動化(RPA/Robotic Process Automation)には、本学で導入しているMicrosoft365の機能であるPowerAutomateを活用しています。

年に3～4回程度、教職員を対象としたPowerAutomateハンズオンを開催しています。2024年度には職員みずからが開発した12個の自動化ツールが稼働しており、少しずつ職員の業務効率化が図られています。専門的なプログラミング知識がなくても、このようなツールを開発することができるのがPowerAutomateの特徴となっています。また、少しずつハンズオンに参加する職員が増えており、先駆的に取り組んだ職員から、周囲の職員に意識が浸透しつつあります。

今後も定期的にハンズオンを開催することで、業務効率化への貢献を図っていきます。



松永 康佑

講師 デザイン学部（情報デザインコース）

MATSUNAGA Kosuke

キーワード：VR、CG、物理シミュレーション、コリオリ力

スペースコロニー空間におけるコリオリ力を体験するVRコンテンツの研究

【研究の概要】

VR・CG技術を活用し、現実では体験できない空間や物理現象を、「体験して理解できる」インタラクティブコンテンツとして提示する研究を行っています。昨年度は、円筒型スペースコロニー内に生じるコリオリ力を、VRテニスとして体験できる教育コンテンツ「コリオリテニス」を開発しました。プレイヤーは仮想空間内でテニスを行いながら、通常とは異なるボール軌道や空間の湾曲を身体的に体験し、非日常的な物理現象を直感的に理解できます。

この研究を通じて、複雑な科学概念を「学ぶ」だけでなく「体験して理解する」新しい教育・展示手法の実現を目指しています。また、ゲームやエンタテインメントの要素を取り入れることで、科学教育とデジタルコンテンツ表現の融合にも取り組んでいます。



桒田 聡志

助教 デザイン学部（情報デザインコース）

MASUDA Satoshi

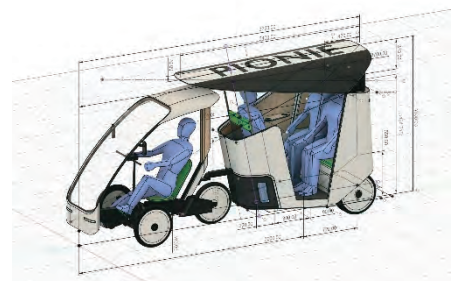
キーワード：プロダクトデザイン、3DCAD、
Rapid Prototyping、ユニバーサルデザイン、
エルゴノミクス

水素アシスト型ペロタクシー「PIONIE」の試作モデル制作・展示

【研究の概要】

エコ・モビリティサッポロ様によって、札幌市内で運用されているペロタクシーの「水素アシスト」型新車両のデザイン開発プロジェクトを2024年から継続実施。人間中心設計に基づいた乗車体験設計と外観デザインのコンセプト立案・監修を担当し、2025年度は実際に乗車できる設計へのブラッシュアップを進めた。

水素アシスト機構部分を含むメカニズム設計製造を担当されているトヨタ自動車北海道様と、桒田が作成したデザイン3DCADデータを元に製造性や乗車体験を討議し、手戻りの少ないプロセスを進行した。経過をモックアップモデル化し、北洋銀行ものづくりサステナフェア（2025年7月23日）と、ジャパンモビリティショー札幌2026（2026年1月23～25日）にて展示し、多くの来客・企業の目に触れた。モックアップモデルは3Dプリント出力（光造形）を中心とし、前者展示向けの試作では、表面処理・塗装を学生とも共同し、札幌市立大学内で完結させた。



矢久保 空遥

助教 デザイン学部（情報デザインコース）

YAKUBO Takanobu

キーワード：共感覚的比喩、感性情報学、インターモダリティ

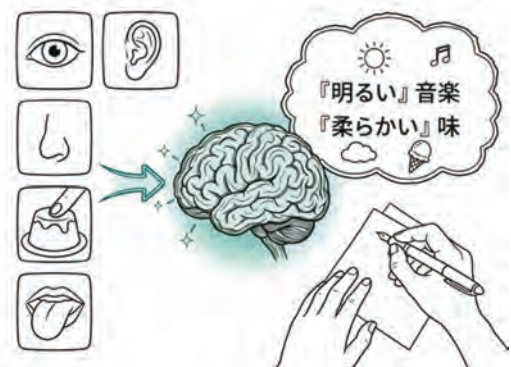
感覚のつながりから考える、人に寄り添うデザイン研究

【研究の概要】

近年の研究では、人がものごとを「明るい」、「やわらかい」、「にぎやか」などと感じる仕組みを、デザインの視点から探っています。とくに、味、色、音、手ざわりといった、ふだんは別々に捉えられがちな感覚が、実際には互いに影響し合いながら印象を形づくっている点に注目しています。

たとえば私たちは、「明るい味」、「やわらかい音」、「冷たい色」のように、ある感覚を別の感覚の言葉で表すことがあります。こうした表現には、人がどのように世界を受け取り、感じ、意味づけているのかを知る手がかりがあります。

研究では、実験やデータ分析に加え、必要に応じて脳活動の計測も使いながら、感覚どうしのつながりや、そこから生まれる印象の特徴を明らかにしようとしています。さらに、そうした知見を、製品、サービス、情報環境、医療や福祉に関わる支援ツールなどの設計へ応用し、使いやすいだけでなく、心地よく、人の気持ちや生活に寄り添うデザインにつなげていくことを目指しています。この研究は、人にとってより自然で無理のない体験をつくるための大切な基盤づくりでもあります。また、教育や地域社会への応用も視野に入れています。



吉田 彩乃

助教 デザイン学部（情報デザインコース）

YOSHIDA Ayano

キーワード：可視化、画像認識、IT 活用

IT を活用した課題解決

【研究の概要】

IT を活用して人々の生活における課題解決や、従来は人の手で行っていた分析に対し、画像処理・画像認識などを活用し、分析から可視化までのプロセスの自動化に取り組んでいます。

例えば、乗合タクシーでは、知らない人同士が乗った時の気まずさが課題となっています。そこで、乗合タクシーの後部座席に車両の位置情報に応じて地域の歴史やイベント情報などを提示するモニターを実装・設置して、その気まずさが低減されるか調べました。

また、生成 AI を活用して医療従事者の方でも特別な訓練を受けないと実施できないようなカウンセリングの訓練アプリを開発しています。



渡部 大志

助教 デザイン学部（情報デザインコース）

WATANABE Hiroshi

キーワード：自己組織化、数理最適化、機械学習、機能分化

最適化によって現れる構造を探る

【研究の概要】

本学のシンボルのモチーフにもなっている雪の結晶。全体の設計図もクッキーのような型もないのに複雑で美しい形の氷になるのは本当に驚かされます。雪の結晶は私たちの視点では小さいですが、一つ一つの水分子から見れば巨大な構造物になります。雪の結晶のように小さな要素間のルールによって大きな構造が生まれることを自己組織化と呼びます。

一方、生物は環境に適応する仮定で様々な機能や形を獲得しました。これも一つの自己組織化です。ただし、雪の結晶では小さな要素間のルールから大きな構造が生まれたのとは反対に、生物では個体という大きな要素が環境に適応するというルールを経て、体の細かい部分を形作ります。

私は主に後者の自己組織化において「このルールからどんな構造ができるのか？」逆に「この構造はどんなルールから生まれるだろうか？」を研究しています。この研究から新しいデザインやシステムが生まれ、私たちの生活が豊かになることを期待しています。



松井 美穂

教授 デザイン学部（共通教育）

MATSUI Miho

キーワード：アメリカ南部文学、人種、
ジェンダー・セクシュアリティ、モダニズム

アメリカ南部文学研究



【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920～50年代)の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家ユードラ・ウェルティ、カーソン・マッカーズなどを研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個々人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。（写真はミシシッピ州オックスフォードにあるフォークナーの自宅。Rowan Oak と名付けられ、現在はミシシッピ大学が管理している。筆者撮影）また、白人作家のみならず、黒人作家・文化の研究も行っています。アメリカ文学・文化の全体像をより良く知るためには、やはり、様々な人種をバックグラウンドに持つ作品を読むことが大事だと考えます。

他に、近年看護教育において注目されている Health Humanities（ヘルスヒューマニティーズ）にも関心を持っています。特に文学と看護教育の連携の可能性を、授業での実践を通して探究していきたいと考えています。

並木 翔太郎

准教授 デザイン学部（共通教育）

NAMIKI Shotaro

キーワード：態度変容、空間ナッジ、利他的バイアス、
精緻化見込みモデル

空間ナッジを用いた健康意識の可視化と食行動変容の促進

【研究の概要】

札幌市の若年層における深刻な野菜不足を背景に、推定野菜摂取量を測定する「ベジチェック®」が導入されましたが、市民の自発的な利用率の低迷が課題です。本研究は、単なる機器の設置に留まらず、利用者の心理的プロセスに深く介入して食行動の変容を促す「空間ナッジ」の設計手法を開発・検証しました。大学生を対象とした共感マップ分析の結果、野菜を摂らない主な阻害要因は「調理の面倒さ（自己への怠惰）」である一方、大切な人のためなら努力できるという「利他的バイアス」の存在が明らかになりました。この知見に基づき、①共感情報の提示による意識化、②ベジチェックでの客観的可視化、③利他的動機に基づくレシピカード提供による行動支援、の3段階からなる空間ナッジ・モデルを提案し、イベント会場（NoMapsWELLNESS）にて実証実験を行いました。本実践は、論理的な説得ではなく人間の直感（システム1）や他者への優しさに寄り添い、自然な流れで測定や食行動を誘発する、新たな健康増進介入の可能性を示唆していると考えられます。



2. 看護学部

檜山 明子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

HIYAMA Akiko

キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全

医療施設での転倒予防看護と地域在住高齢者の転倒予防方略

【研究の概要】

転倒事故は、地域で暮らしていても入院していても、生活の質に関連する事象です。すべての転倒が問題になるわけではありませんが、転倒は傷害を引き起こすため、転倒しないこと、あるいは転倒してもけがをしないことが重要です。

一方で、活動性が高まれば、転倒発生確率が高くなり、動きを制限すれば転倒発生確率は低くなります。しかし、動きを制限すると生活に支障をきたします。



私は転倒予防のための看護技術を研究しています。これまで、認知行動の視点、運動力学的視点で転倒要因に関する検証をしてきました。転倒は、高齢者に限らず発生しますが、発生するまでの要因やプロセスには、一定の特徴があることがこれまでの研究からわかりました。今後も継続して、人々がもつ転倒予防方略を抽出し普及させる取り組みをしています。

樋之津 淳子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

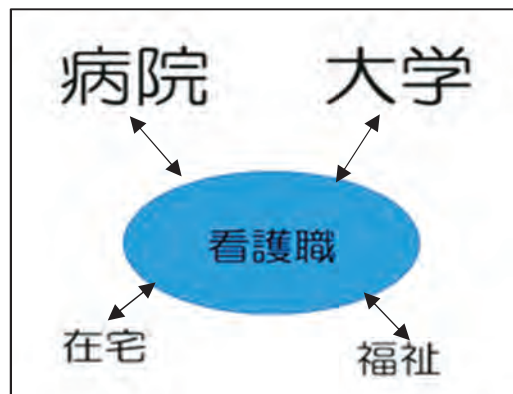
HINOTSU Atsuko

キーワード：継続教育、看護コンソーシアム、看護技術

大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた 継続教育の効果

【研究の概要】

看護系大学と医療施設が連携・協働して看護専門職者の人材育成やキャリア支援を行う共同体である、看護コンソーシアム活動に取り組んでいる。看護師が基礎教育を終えた後、さらにステップアップするために必要な研修を個々の所属施設で行うのではなく、大学の持つ人的、物理的リソースと複数の医療・福祉施設の連携・協働による横断的な取り組みが必要であると考えている。7つの研修のうち、6つの研修はすべてZoomを用いた遠隔会議システムで実施した。遠隔研修への参加者は回を重ねていく中で双方向性のディスカッションがスムーズとなり、遠隔研修であっても研修効果が非常に高く、満足度も高いことがわかった。2025年度からは履修証明制度を導入し、研修のさらなる充実を図っている。



武富 貴久子

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

TAKETOMI Kikuko

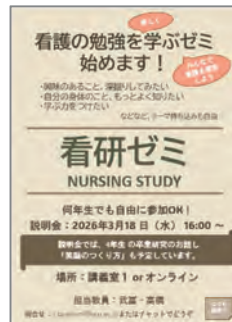
キーワード：看護基礎教育、継続教育、学習環境

「共に学ぶ」-看護師の学習をサポートする取り組み-

【研究の概要】

看護師は、日々進歩する医療に対応しながら、看護ケアの実践、後輩への指導、研究活動など多様な役割を担っています。そのため、キャリアの発達段階に応じて学び続ける力が重要になります。そこで、学生や看護師と「共に学ぶ」ことをキーワードに、学ぶ力を育てる教育・研修のあり方を研究しています。学部生の学ぶ力を考えるゼミや、看護師のキャリア段階に応じた継続教育を通して、臨床と教育をつなぐ学びの場の創出を目指しています。

【2025 年度の取り組み】



学生が興味のあることを探し、皆で考えるゼミを始めました



ハワイ大学シミュレーションセンターの研修プログラムを国際ワークショップとして開催しました

中平 紗貴子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

NAKAHIRA Sakiko

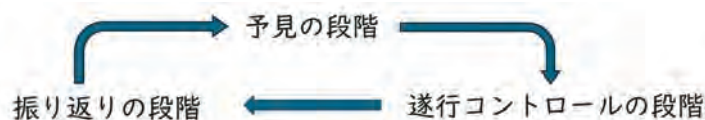
キーワード：自己調整学習、看護教育、看護技術

自己調整学習に関する研究

【研究の概要】

自ら学修に取り組むとは、どのようなことなのでしょう。私は、看護学生が知識や技術を学修していく過程において、学修が能動的かつ自律的なものとなるよう検討したいと考えています。学修を自分で円滑に進められる場合は問題ありませんが、実際には、学ぶ意欲はあるものの学修方法が分からない、そもそも学ぶ意欲が湧かない、あるいは自分の学修状況を客観的に把握できないといった、さまざまな課題が見受けられます。

そこで私は、自己調整学習という考え方を学修に活用したいと考えています。自己調整学習とは、予見の段階、遂行コントロールの段階、振り返りの段階が循環するプロセスです。学習動機、学習方略、自己モニタリングといった要素を通して、学習者が自身の学習プロセスに能動的に関わる学修のあり方を指します。私はこの自己調整学習の考え方を活用し、特に看護技術の修得過程において、看護学生が「学び方を学ぶ」ことができる仕組みを構築したいと考えています。



【自己調整学習の循環的なプロセス】

三戸部 純子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

MITOBE Junko

キーワード：ヒューマンエラー、看護教育、マルチメディア学習、認知心理学

基礎看護技術動画教材の理解しやすい提示方法の検討

【研究の概要】

看護技術の習得には、教科書のようなテキストだけでなく、実際に手技を行っている動画を視聴することによるイメージ化が重要です。しかし、学生が事前学習で動画を視聴していても、実際に自分で技術を行ってみると、「一生懸命事前学習をしたのにうまくいかなかった」という振り返りを行うことが度々あります。初学者の場合、動画を見ていても、技術のポイントをつかむことができずに、漠然と画面を眺めている可能性があり、見るべき場所に注意が向きづらく、そのことが技術習得に影響を及ぼしている可能性があります。そこで、映像の焦点の当て方や、ナレーション・字幕といった解説方法を変えることによって、初学者でも効率よく技術のポイントを理解し、患者さんにとって安全・安楽な手技を習得することができるかを実験的に検討しています。



a. 全体



b. 手元

図. 動画のイメージ

渋谷 友紀

助教 看護学部（基礎看護学領域）

SHIBUYA Yuki

キーワード：Graphic Medicine、看護基礎看護学、看護継続教育、ポジティブメンタルヘルス、メンタルヘルス

看護学生のメンタルヘルス支援における Graphic Medicine の活用

【研究の概要】

私は、看護教育における学びとメンタルヘルス支援をテーマに研究しています。

特に、マンガを使って自分の気持ちや体験を表現する「Graphic Medicine」に注目しています。

言葉ではうまく話せない思いやストレスも、絵や短い物語にすると見つめ直しやすくなることがあります。

現在は、看護学生がマンガを描くワークショップを通して、自分の気持ちの変化に気づいたり、他者への共感や自己理解を深めたりする可能性を調べています。

こうした取り組みを通して、学生が安心して学び、分らしく成長できる看護教育のあり方を考えています。



※作品概要：①自分が夜空を見上げている。②5つの星が描かれ、その上から黒く塗りつぶされている。③さらに大きな星1つが黒く覆われている。④その黒く塗りつぶされた星を、暗闇の中に立つ自分が見上げている。この学生は「夜空には星があることはわかっているが、今の自分には見えない」「それでも自分に見える星があるはずだ」と語り、不安の中に希望を見出そうとする心情を表現していた。

本多 いづみ

助教 看護学部（基礎看護学領域）

HONDA Izumi

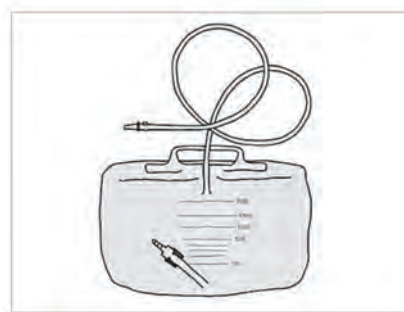
キーワード：尿道留置カテーテル、看護技術、看護教育

安全性と生活機能維持を両立する看護技術の探究

【研究の概要】

看護は、入院中だけでなく退院後の生活まで見据えた支援が重要になります。とくに入院中の活動量の低下は、退院後の生活機能に影響を及ぼすことが知られています。私は、この活動低下を引き起こす要因の一つとして「尿道留置カテーテル」に注目しています。尿道留置カテーテルは医療上必要な処置であり、感染予防の観点からその管理が重視されてきました。しかし、カテーテルが入っていることで動きにくくなり、歩行や日常動作が制限される可能性があります。これにより筋力や生活機能が低下し、退院後に元の生活へ戻りにくくなるのが懸念されます。

そこで、尿道留置カテーテルの使用が患者さんの生活の質や身体機能にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする研究を進めています。患者さんが入院前と同じ生活に近づけるよう、より適切な看護介入のあり方を探ることを目指しています。



吉田 実和

助教 看護学部（基礎看護学領域）

YOSHIDA Miwa

キーワード：血圧測定、看護学生、看護技術

血圧測定技術に関する研究

【研究の概要】

血圧測定は患者さんの健康状態を把握するために重要で、高い頻度で行う看護技術です。看護学生にとっては、入学して早期に教育を受ける技術となっています。

しかし、血圧測定技術は、腕帯を適切な強さで巻くことや、聴診器をあてて血管音を聴取しながら血圧計のねじを細かく操作し、血圧値を示す目盛りを読み取るという動作を同時に行うことから、初学者にとっては習得が難しい技術となっています。

看護学生を対象に、減圧操作（ねじを操作し、一定の速さで空気を抜く）に着目して、デジタル教材で記録した減圧の速さと教員による血圧測定技術の評価との関係を調査しました。教員による技術評価が高い学生ほど、システムで計測された減圧の速さにばらつきが少なく、教材の測定値が技術評価に活用できる可能性が示されました。今後はゲーム要素を取り入れ、楽しく練習できる教材の開発を目標に研究に取り組んでいきます。



松野 千代美

教授 看護学部・看護学研究科 看護管理学領域

MATSUNO Chiyomi

キーワード：心不全、パンデミック、

知ろう！防ごう！心不全パンデミック in 桑園地区

【研究の概要】

心不全患者数は世界的に急増し、医療費と社会保障への負担が重くなっています。心不全は患者と家族の生活の質を深刻に低下させ、再入院が繰り返されますが、食事、運動、服薬管理、早期発見で心不全の発症や悪化を防ぐことが可能です。心不全パンデミックという社会課題に対して専門職だけでなく地域全体で予防意識を高め、心不全問題に取り組む必要があります。

今回対象とする桑園地区は人口が多く、高齢者が過去 20 年で約 2.4 倍に増加しています。そこで、同地区の循環器専門病院と大学との連携により、地域の心不全予防に取り組みたいと考えています。

現在、研究計画策定段階であり、今年度中に開催予定の健康応援プロジェクトへの参画による、同地区市民の認知状況とニーズについてリサーチを行い、啓蒙活動を推進したいと考えています。



鬼塚 美玲

准教授 看護学部（看護管理学領域）

ONITSUKA Mirei

キーワード：積雪寒冷特別地域、地震災害、リスク、災害看護

寒冷・雪環境下の災害における看護技術の実践困難と工夫

【研究の概要】

災害時はライフラインの途絶や各種資源の不足などにより、看護技術の実践困難が生じます。

厳冬期に災害が発生した場合、寒冷環境や雪環境の影響を受け、実践困難リスクが高まります。そのため、寒冷・雪環境下の災害を想定し、最善な方法で看護技術を実践できるよう平時から準備しておく必要があります。

令和 6 年能登半島地震で災害看護を実践した石川県内の病院看護師（197 名）と DMAT 看護師（801 名）を対象に、寒冷・雪環境下で実践困難が想定される看護技術 34 項目について実践困難の有無、困難感の程度、実践困難を感じた具体的場面と工夫を調査しました。

その結果、寒冷・雪環境下で実践困難があった看護技術は、「搬送」「手指衛生」「体温測定」「フィジカルアセスメント」「清潔援助」などでした。寒冷・雪環境下では「ストレッチャーの車輪が積雪や泥濘にはまり、力で乗り切った」「手の感覚があまりない状態で担架を持つことがとても怖かった」「厚着のために呼吸の評価や全身の観察に時間を要した」「室温が低く、布団を掛けながら陰部洗浄を行った」など、様々な実践困難が生じていました。これらの実践困難の解決を目指し、現在マニュアルの開発を進めています。



樋口 佳耶

助教 看護学部（看護管理学領域）

HIGUCHI Kaya

キーワード：看護管理学、医療制度・政策、
タスク・シフト/シェア

制度・政策の変化は看護の現場をどう変えるのか ー タスク・シフト/シェアに着目して ー

【研究の概要】

医療の現場では、国の制度・政策が、医療従事者の日々の仕事の進め方に大きな影響を与えています。私は、特に看護にかかわる制度・政策が、実際の看護師の働き方や看護の質にどのような影響をもたらしているのかに関心をもち、研究を行っています。

現在、医師の長時間労働を改善するために「医師の働き方改革」が進められており、その1つとして「タスク・シフト/シェア」と呼ばれる政策が進められています。これは、これまで医師が担ってきた業務の一部を、看護師など医師以外の医療従事者が行っていくというものです。

この政策については、看護師の間でもさまざまな意見があります。新たな業務により看護の専門性をより発揮できるという声がある一方で、忙しさが増し、本来大切にしてきた看護が十分に行えなくなるのではないかと不安もあります。

そこで私は、タスク・シフト/シェアによって看護師の仕事がどのように変化したのかを調査しました。その結果、看護師が活躍できる場面が広がる一方で、専門性を支える基盤となる業務が手薄になるという課題も見えてきました。今後は、こうした政策を看護の質の向上につなげるための具体的な方策を検討していきたいと考えています。



奈良間 美保

教授 看護学部（小児看護学領域）

NARAMA Miho

キーワード：小児看護学、相互主体性、エピソード記述

こどもや家族と看護師の相互主体性に関する研究 ～エピソード記述を用いた体験の振り返り～

【研究の概要】

病気や障がいのあるこどもの多くは命が救われるようになり、家族の負担の軽減も少しずつ図られるようになってきました。その一方で、健康問題のあるこどもと家族が生き生きと主体的に生きるためのケアを形に現わすことは難しく、看護師自身も迷いを感じやすい状況にあります。

そこで、エピソード記述の手法を用いて、看護師が日頃の出来事やその中で感じていることを振り返る取り組みを行っています。看護師同士が看護実践で心に残った場面をとりあげて、互いの体験を共有し合うことは、こどもや家族が一人の人としてあることを実感するだけでなく、看護師自身も一人の看護師として、さらには一人の人としてあることを実感できる機会にもなります。これらの活動を通して、こどもや家族と看護師が互いに主体として受けとめ合うこと、ひいてはこどもと家族主体の看護につながることを願って取り組んでいます。

こどもや家族と
関わる看護師の
体験の共有



加藤 依子

准教授 看護学部（小児看護学領域）

KATO Yoriko

キーワード：体験型アレルギー教室、小学生

食物アレルギーのあるこどものための体験型学習プログラム

【研究の概要】

食物アレルギーのあるこどもたちは、成長とともに、外食や学校生活などで「自分で考え、判断し、行動する力」が求められるようになります。その力をたのしく学習していくために、あそびの要素を取り入れた体験型学習について検討しています。諸外国では、こども同士で教えあう体験型学習プログラムの効果が報告されていますが、日本では、こどものための体験型学習プログラムの報告は多くありません。

取り組もうと考えている体験型学習の中では、食品ラベルを読むゲームや、買い物体験、外食時に原材料を店員に尋ねる体験などを行います。この体験では、こども自身が気になった場面を写真に撮ります。その写真をもとに、こども自身の考えや気持ちを、体験型学習に参加している同年代のこどもや保護者、医療者と共有する場を設けます。

こども自身の考えや気持ちを共有するひとつの方法としての写真の活用は、大人では気づきにくい「こどもの視点」が見え、楽しく・安全に日常生活を送るための方策のヒントが得られる可能性があります。

この体験型学習プログラムをつくりあげていく過程では、こどもと家族、医療者、関わる多くの人々との対話を大事にしています。



牧田 靖子

講師 看護学部（小児看護学領域）

MAKITA Yasuko

キーワード：DX 教材、アナフィラキシーショック、エピペン注射技術

母性・小児看護学領域におけるMR教材の開発

- アナフィラキシーに対するエピペン注射技術

【研究の概要】

私は、母性・小児看護学にける確実な技術修得に向けて、2023 年度よりMR（複合現実）技術を用いた学習教材の開発を研究しています。

この教材は、専用ゴーグルを装着すると、目の前に専門看護師の「ホログラム」が現れます。学習者はその映像に自分の手を重ね合わせることで、正しい動きを直感的に「模倣」して練習できます。

最新デバイス（Meta Quest 3）を採用し、現在は緊急時の「エピペン注射」教材を開発、ユーザー評価を実施しています。

市民向けの体験会では、小学校高学年以上の児童・大人から「次から一人で実施できる」という評価を得ました。

今後はこの教材を使用後、一定期間が経過した後も正確な技術を維持できているのかを検証し、より実効性の高い教育ツールの確立を目指す予定です。



共同研究者： 母性看護学領域）石引かずみ・久保田祥子 デザイン学部）三谷篤史

荒木 奈緒

教授 看護学部（母性看護学領域）

ARAKI Nao

キーワード：胎児異常、妊婦、支援体制の構築

胎児異常を診断された女性への助産師の支援

【研究の概要】

近年、産科領域において出生前診断技術が大きく前進し、様々な方法を用いて妊娠中に胎児の疾病を診断することが可能となった。妊娠中に胎児の形態異常、機能異常、染色体異常、遺伝性疾患を診断される妊婦は急速に増えることが予測され、胎児異常を診断された妊婦の支援体制の構築が急がれる。

しかし、当事者のみならず看護職の両者にコンセンサスの得られた具体的支援の方法論は未だ開発されていない。そこで本研究では、胎児異常を診断された妊婦や出産後に NICU 入院となった新生児の母親と関わることの多い助産師をケアの専門家として位置づけ、専門家の同意の程度や対立する意見のすり合わせを行い、具体的支援内容のコンセンサスを形成することを目的とし調査を実施している。



図1. 胎児異常の診断直後から出産まで続く思い

石引 かずみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

ISHIBIKI Kazumi

キーワード：Women-centered care、分娩期、出産体験

女性が安心して自分らしく出産できるケアを目指して —Women-centered care の視点から—

【研究の概要】

出産は、女性の人生においてかけがえのない経験であり、その体験は産後の心身の健康や育児にも影響を与えます。安心して満足のいく出産体験は、産後うつや、母親としての自信の形成にもつながることが知られています。

世界保健機関（WHO）は、このようなポジティブな出産体験を支えるために、「Women-centered care（女性中心のケア）」の重要性を示しています。これは、女性の思いや価値観を尊重し、その人らしい出産を支えるケアのことです。

しかし、その具体的な内容は医療者によって捉え方が異なり、ケアの質にばらつきが生じている現状があります。

本研究では、女性を支える専門職である助産師の実践に着目し、「女性中心のケア」とは具体的にどのような関わりなのかを明らかにすることで、より良い出産ケアの実現と、母子と家族の健康に貢献することを目指しています。

すべての女性が、安心して自分らしい出産を迎えられる社会の実現につながることを期待しています。



岡 園代

講師 看護学部（母性看護学領域）

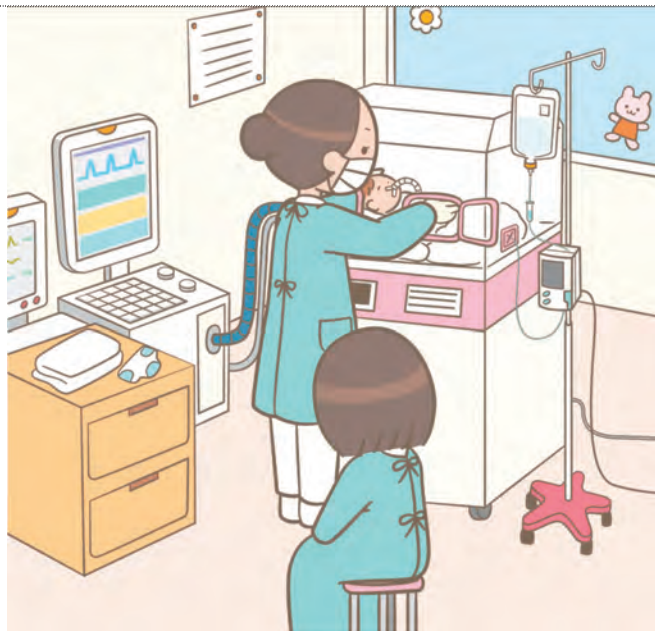
OKA Sonoyo

キーワード：ハイリスク新生児

超低出生体重児の出生直後の初期ケアプロセス

【研究の概要】

少子化に伴い、地域の周産期医療体制の再編すなわち集中化と重点化が急ピッチで行われています。そのことによって医療の効率化は進みますが、一方で地域での医療提供の質の担保が困難になることが危惧されます。“世界で最も赤ちゃんが亡くならない国”の一つとして研鑽を重ねてきた新生児看護の維持・発展が難しい状況になってきています。ハイリスク状態でなく出生されるのが最も良いのですが、いざといった時にも多くの赤ちゃんさんが”Intact Survival 後遺症なく生存”できるように今の看護ケアを言語化し、伝えいけるように可視化することでケアの均霑化を維持することや看護師の継続教育ツールの開発につなげられるような基礎研究に取り組んでいます。



小野澤 かおり

講師 看護学部（母性看護学領域）

ONozAWA Kaori

キーワード：出生前検査、助産師、相談支援

助産師による出生前検査の相談支援の実践に関する研究

【研究の概要】

出生前検査は、お腹の赤ちゃんの健康状態や生まれつきの特徴（染色体異常）があるかどうかを調べるための検査です。検査の技術は年々向上しており、それとともに検査に関心をもつ妊婦の数も増えています。検査の結果によっては、障害のある子どもを産み育てるかどうかなど、出産についてさまざまな選択を考える必要があり、その判断に悩む妊婦さんも少なくありません。そのため、検査を受けるか受けないか、結果が出た後にどうするかについて、正確な知識を伝え、妊婦さんと家族が十分に考えられるように助産師がサポートすることが重要です。

こういった背景から、出生前検査に関する相談支援（相談にのったり一緒に考えるサポート）の状況について、全国の助産師を対象に研究しています。

これまでに、助産師の個人的な背景や学習環境、職場の特徴などの面から、相談支援の実践に何が関連しているのかを明らかにしてきました。

これらの結果を助産師の教育に生かし、多くの妊婦さんが質の高い相談支援を受けられる環境を整えることを目指して、研究を続けています。



久保田 祥子

講師 看護学部（母性看護学領域）

KUBOTA Shoko

キーワード：性的同意、性暴力予防、性教育

日本における Sexual Compliance の実態把握

【研究の概要】

私は、日本において人々が「性的同意」についてどう考え実践しているのか、その考えや実践の背景には何があるのか、ということを研究しています。性的同意とは、言葉なのか、行動なのか、心の動きのことなのか、どうやって示すのか、どうやって確認するのか、など、色々な角度から考える必要があります。その手掛かりとして私が注目しているのが「Sexual Compliance（迎合的な性行為/性的追従）」という概念です。これは、「欲求が無い、または望んでいないにも関わらず、自ら進んで性的な行為を行うこと」を指します。日本人特有の現象などではなく、欧米では古くから研究対象となっている概念です。日本では Sexual compliance に関する研究はほぼ無く、どのぐらいの人が経験しているのか、なぜそのような行為をするのか、その結果どういった影響があるのかなど、その実態は学術的には明らかにされていません。そのため、今後インタビューやアンケートなどを通して実態を把握し、それを元に性的同意の望ましいあり方を考え、性暴力予防や、その教育につなげていきたいと考えています。



寺林 加菜子

助教 看護学部（母性看護学領域）

TERABAYASHI Kanako

キーワード：無痛分娩、出産体験満足度、助産師

出産方法の違いで、出産体験の受け止めはどう変わるのか

【研究の概要】

出産体験は、赤ちゃんを産む瞬間だけで終わるものではなく、その後の女性の気持ちや育児への向き合い方、さらには家族の生活にもつながる大切な経験です。私は、出産を医療的な出来事としてだけでなく、女性とその家族の健康や幸せに関わる体験として捉え、研究を行っています。特に、女性がどのような思いで出産にのぞみ、その経験をどのように受け止め、意味づけていくのかに関心を持ち、出産体験や意思決定に関する研究に取り組んでいます。

昨年の研究では、近年選ぶ人が増えている無痛分娩を経験した女性と、そうではない女性を対象に、出産方法の違いが出産体験の受け止め方にどのように関わるのかを調べました。その結果、出産体験全体の満足度には分娩方法による大きな差はみられませんでした。出産を通して「新しい自分に気づく」「自分の力を見つける」といった体験には違いがみられました。これは、どちらの出産方法が良い・悪いということではなく、出産体験の意味づけが出産方法によって異なる可能性を示しています。

出産方法が多様化するなかで、妊婦がそれぞれの特徴を理解し、自分に合った方法を納得して選べるよう支えることが大切です。本研究は、女性が自分らしい出産を実現し、その後の生活につながる前向きな体験として受け止められるよう支援するための基盤となる知見を示しています。



菅原 美樹

教授 看護学部（成人看護学領域）

SUGAWARA Miki

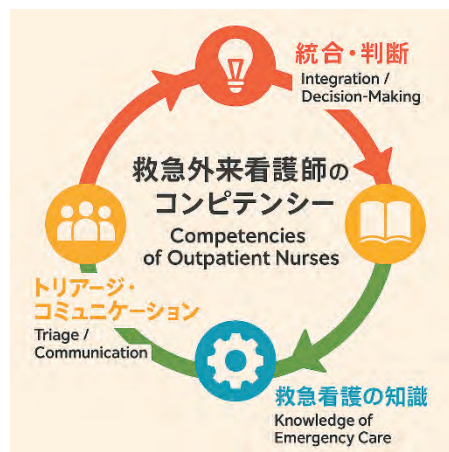
キーワード：救急外来看護師、能力、コンピテンシー、看護実践

二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシーに関する研究

【研究の概要】

日本の二次救急医療機関には、増加する高齢救急患者を背景に、様々な疾病および怪我を負った患者に対して、疾病の予防や継続ケアを含む全人的かつ包括的な医療の一端を担う役割が求められています。二次救急医療機関は、救急医療の重要な役割を担い、24時間 365 日、地域で発生する救急患者への初期診療を行い、必要に応じて入院治療を行っていますが、救急の当番日は約 70%の病院で 1 人の医師が担当しているなど、医師の処遇を含めた救急医療体制の改善が急務となっている現状があります。

こうした二次救急医療機関の診療体制を充実させる方略として、救急外来を担当する看護師に必要な能力を知識・スキル・態度を統合した実践的なコンピテンシーとして明らかにした教育が必要であると考え、研究に取り組んでいます。



卯野木 健

教授 看護学部（成人看護学領域）

UNOKI Takeshi

キーワード：急性期、集中治療室、重症患者、QoL

ICU 後の長期メンタルヘルスの変化パターン

【研究の概要】

ICU（集中治療室）を退室した患者さんの心の健康が、その後どう変化するかを 4 年間追跡した研究です。日本の 7 つの ICU から 223 名が参加しました。その結果、うつ症状のある方の割合は退室 1 年後の約 25%から 4 年後には約 33%へ増加し、不安症状も約 15%から約 22%に増えていました。一方、PTSD（心的外傷後ストレス障害）はやや減少しました。症状の変化パターンは人によって異なり、「軽いまま安定」「徐々に悪化」「中程度で持続」など複数のタイプが見られました。また、大学卒以上の学歴がある方は重いうつや不安になりにくい傾向がありました。この研究から、ICU 退室後の心のケアは短期間では不十分で、長期的なフォローアップが重要であることが示されました。



栗原 知己

准教授 看護学部（成人看護学領域）

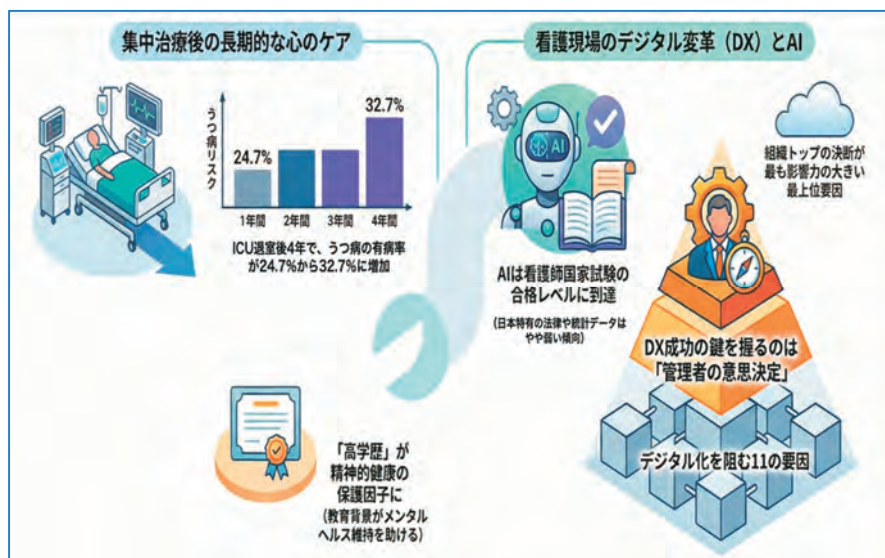
KURIBARA Tomoki

キーワード：集中治療、看護、AI、データサイエンス

集中治療 × データサイエンス × AI

【研究の概要】

現代の集中治療医学の進歩により、かつては助からなかった多くの命が救われるようになりました。しかし、退院後に精神的・身体的な後遺症(PICS)に悩む患者さんは決して少なくありません。そのような患者様の社会復帰を支援できるよう、日々研究に取り組んでいます。大規模データの活用や、AI・データサイエンスを医療・看護教育に应用する研究にも取り組んでいます。



(イラストは 2025 年度の研究成果をまとめたものです)

高橋 奈美

准教授 看護学部（成人看護学領域）

TAKAHASHI Nami

キーワード：慢性疾患、慢性看護、クロニックイルネス

慢性疾患とともに生きることを支える看護

【研究の概要】

私の研究分野は、慢性疾患とともに生きる患者さんやご家族の経験に目を向け、「病気とともに生きることを支える」ために、どのような関わりや支援が大切なのかを考える分野です。慢性疾患とは、長い時間をかけて付き合っていく必要のある病気のことで、治療だけでなく、生活や思い、人との関係にも大きな影響を与えます。

このような生き方を含めて病気を捉える考え方として「クロニックイルネス」という概念があります。これは、病気を人生の中の出来事として受け止め、時間とともに意味や向き合い方が変わっていく過程に注目する視点です。

病気を経験する中での迷いや選択、生活の変化を、一人ひとりの「病みの軌跡」として丁寧に捉えます。「病みの軌跡」とは、病気によって生活や考え方が揺さぶられる中で、その人が病いの意味を問い直し、時間の経過とともに生活や価値観を再び編み直していく歩みそのものを指します。その軌跡を理解することは、医療や看護だけでなく、日常生活や気持ちの面も含めて、病気とともによりよく生きることを支えるためのヒントにつながります。



牧野 夏子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

MAKINO Natsuko

キーワード：成人看護学、急性期看護学、救急看護、外傷看護、看護実践

重症外傷患者に対する看護教育の体系化に向けた取り組み

【研究の概要】

外傷とは、交通事故や転落などの外的な要因により身体に衝撃を受けることで、何らかの傷害をきたすことです。特に、重症な外傷の場合、適切な治療を受けなければ命が助からないことが多くあります。重症な外傷患者の看護をおこなう看護師は、損傷部位が様々な多様性、何度も繰り返し手術などを必要とする複雑性、そして急な状態変化を起こしやすいという特徴から苦手意識をもつ人も少なくありません。

日本では、外傷看護の体系的な教育は充分ではないと言われています。そこで、重症外傷患者に対する看護を体系的に教育することを目指し、これまでに 4 つの研究に取り組んできました(右図①～④)。その中で、外傷看護特有の学習ニーズが明らかになり、看護師の教育方法に関する新たなアプローチが必要であることがわかりました。今年度は、昨年度から引き続き、外傷看護に関する学習ニーズを評価するアセスメントツールを開発する予定です(右図⑤)。これらの調査結果を基に、看護師を対象とした外傷看護の教育方法について、今後も検討を重ねていきたいと考えています。

① 看護師の学習内容を書籍から調査

② 看護師の教育機関における教育内容を調査

③ 看護師の外傷看護に関する学習ニーズ調査

④ 看護師の外傷看護に関する学習ニーズの全国調査

⑤ 外傷看護に関する学習ニーズアセスメントツールの開発

外傷看護に関する教育方法の検討

工藤 京子

講師 看護学部（成人看護学領域）

KUDO Kyoko

キーワード：認知症マフ、身体拘束

認知症マフの認知度アップと活動の定着化をはかる

【研究の概要】

昨年立ち上げた、認知症マフを作成して病院に届ける活動を 1 年間行った。活動の中で、大学祭での広報活動も行い、地域の人達がマフを知らないという現実も感じた。

病院に対しては、学生達と共に作成したマフを計 2 回届けられた。看護師からは、その方によって可愛いと喜ぶ方もいるが、意識レベルによって視覚的には反応しないが触ることでの刺激もあると聞き、見た目のデザインだけでなく、手触りや硬さ等、触覚を考えて作成していく事を新たに知った。また視覚面でも、コントラストがハッキリしているほうが認識しやすいとのことで、配色の工夫も取り入れていきたいと考える。

認知度を上げるために、活動の様子を定期的に大学の X にて配信しており、今後も向上につなげたい。

実際にマフを装着している場面は、見たことがないため、機会があればどのような反応を示すのか確かめて、作品の評価につなげていく。今年度は、学会にも参加して、マフを活用している全国の方とのつながりを作ること考えている。さらに、何らかの形で研究に活用できれば、社会的な認知度の向上にも繋がると考える。



澤口 宙人

助教 看護学部（成人看護学領域）

SAWAGUCHI Hiroto

キーワード：がん看護、症状緩和、電子的患者報告アウトカム、放射線療法

頭頸部がん患者の症状管理におけるデジタル技術の臨床応用

【研究の概要】

私は、がん看護学を専門領域とし、とくに頭頸部がん患者のデジタル技術を活用した症状マネジメント（ePRO: electronic Patient-Reported Outcomes）の実装研究に取り組んでいます。

現在は、スマートフォンアプリを用いた症状モニタリングが、患者－医療者間のコミュニケーションや苦痛の緩和に与える影響について研究しています。

がん患者がスマートフォンアプリを使用して症状を記録することにより、症状の可視化が促進され、さらにそれが症状の振り返りや自己管理に活用可能であることが明らかになりつつあります。

今後は、患者の自己管理により一層役立つ仕組みづくりを進めていきたいと考えています。



平山 憲吾

助教 看護学部（成人看護学領域）

HIRAYAMA Kengo

キーワード：がん、薬物療法、有害事象、意思決定、生活の質（Quality of Life：QoL）、家族

薬物療法を受ける高齢患者および医療者の意思決定に関する研究

【研究の概要】

高齢社会の進展に伴い、がん罹患し薬物療法（抗がん剤）を受ける高齢患者は増加している。高齢のがん患者は、加齢による身体機能や認知機能の変化、さらには家族や社会的支援体制の影響を受けながら治療選択を行う必要があり、その意思決定過程は複雑である。先行研究では、患者・家族・医療者が相互に関わることの重要性が指摘されているものの、高齢者に特化した意思決定支援の枠組みは十分に確立されていない。

これまで、薬物療法を受ける高齢のがん患者の意思決定の実態に関する研究を行い、患者がどのような価値観や背景因子を踏まえて治療継続の選択を行っているのか明らかにした。さらに、医療者の視点に着目し、高齢がん患者の意思決定支援に関する認識や実践の特徴を整理するための研究を進めている。

これらの成果を踏まえ、患者と医療者双方の視点を統合し、高齢がん患者の価値観を尊重した意思決定支援の在り方を明らかにすることを目指す。



貝谷 敏子

教授 看護学部（老年看護学領域）

KAITANI Toshiko

キーワード：高齢看護学、スキンケア、看護政策・行政、
医療経済学、脊髄損傷

車いすアスリートチーム支援の取り組み

【研究の概要】

車いすアスリートが褥瘡によって、競技への参加制限や生命の危機に陥ることなく、よりよい自己実現に向けた競技生活を営めるように褥瘡予防を支援することを目的とする。

そのために、全国の支援体制を構築する。

1. 全国の褥瘡外来の名簿の整備とアスリートチーム支援のためのモデルケースの提案
2. 教育用の動画を作成し、アスリートにアクセスしやすい環境を整備
3. 脊髄損傷者支援のためのエビデンスの蓄積しシーティング外来普及にむけての活動
SCI 者が受傷後から慢性期にむけてどのような継続支援を受けているのか？
レセプトデータより脊髄損傷受傷後からの医療機関の受診状況を調査し以下のことを明らかにする。

- （1）SCI 受傷後の入院期間とその後の合併症との関連
- （2）SCI 受傷後からの外来通院の現状と褥瘡発生との関連
- （3）受傷後の褥瘡の治療の実態
- （4）褥瘡の緊急入院や感染症の現状

調査方法

JMDC のデータ取得し現在解析中

*JMDC データ：健康保険組合より二次利用許諾を得て受領したレセプトデータ及び健診データの匿名加工データの取得申請

原井 美佳

准教授 看護学部（老年看護学領域）

HARAI Mika

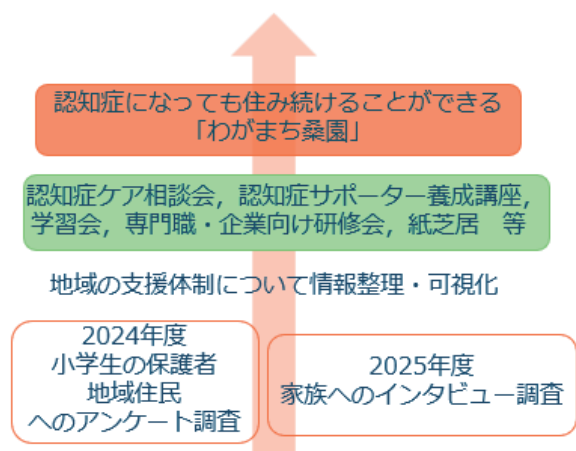
キーワード：認知症、わがまち桑園、家族インタビュー、紙芝居、
桑園認知症ケア研究会

認知症になっても住み続けることができる「わがまち桑園」の取り組み

【研究の概要】

桑園認知症ケア研究会（オレンジ桑園）の世話人として、研究と地域での取り組みを行っています。認知症になっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる社会を目指し、認知症ケアの専門職や、地域のさまざまな関係者・団体と力を合わせて活動しています。

この取り組みは現在 4 年目を迎え、住民さんのご協力をいただきながら、少しずつ地域に根づいてきているように感じています。イメージ図にある活動を通して得られた気づきを、リーフレットにまとめて地域の皆さんへお届けしています。



「わがまち桑園」を目指す取り組み（イメージ図）



西川 めぐみ

助教 看護学部（老年看護学領域）

NISHIKAWA Megumi

キーワード：高齢看護学、腎移植、アドヒアランス、看護倫理学

腎臓移植レシピエント・ドナーが必要とする心理的支援の内容と評価

【研究の概要】

末期腎不全の腎代替療法には、血液透析、腹膜透析、腎臓移植の3種類があります。腎臓移植は3つの治療方法のうち、最も生活の質（Quality of life：QOL）の改善が見込まれる治療方法ですが、生体ドナーまたは献腎ドナーからの臓器提供を必要とします。

生体ドナーには、医学的なメリットはないため、ドナーのQOLの維持・向上のためには、身体的支援だけではなく、心理的支援が重要であると考えられます。また、レシピエントにおいても、移植後の長期的な自己管理を継続していくためには、心理・社会面での支援が重要です。

そのため、生体ドナーやレシピエントがどのような支援を必要としているのか、また、医療者から受けた支援に対し、どのように感じているのかを明らかにすることで、今後のよりよい移植看護へつなげていきたいと考えています。



松浦 有沙

助教 看護学部（老年看護学領域）

MATSUURA Arisa

キーワード：脳卒中、アドバンス・ケア・プランニング、
エンド・オブ・ライフケア

脳卒中患者のアドバンス・ケア・プランニングに関する研究

【研究の概要】

血管疾患は日本人の死因第4位、かつ介護の要因となる主要な疾患です。脳卒中（脳梗塞や脳出血など）を発症すると、様々な後遺症が残る可能性があり、そのうちの一つが意識障害です。意識障害があると、他者とのコミュニケーションが難しくなるため、医療に対する希望や生き方に関する価値観を伝えることが出来なくなります。そのため、脳卒中によって重大な後遺症が生じる前から、自らの将来について患者・家族・医療者で話し合いをしておくこと（アドバンス・ケア・プランニング）が大切になります。

しかしながら、脳卒中経験者のうち、幸いにも症状が軽く自宅へ帰ることができた人の内の2～14%しか、その話し合い（アドバンス・ケア・プランニング）を行っていないことが分かりました。（Skolarus LE, 2022）脳卒中を経験された患者さんご家族が、どのようなことを話し合っておくといざという時に備えられるのか、看護師がその話し合いにどのように参加するとより効果的な話し合いができるのかについて研究を行っていききたいと考えています。



石橋 佐枝子

准教授 看護学部（精神保健看護学領域）

ISHIBASHI Saeko

キーワード：神経発達症、オープンダイアログ、家族支援、リアルワールドデータ(RWD)、AI チャットボット

オープンダイアログによる家族支援と次世代データ活用による包括的支援

【研究の概要】

児童・青年期の精神的困難に対する早期発見と包括的支援を目指し、研究を進めています。

これまで、児童精神科診断用半構造化面接（KSADS-PL-5）や、ADHD 等外在化障害のアセスメント尺度（ADHD-RS-5 等）の日本語版開発と実証を行ってきました。

現在はこれらアセスメント研究を発展させ、オンラインでのオープンダイアログ（対話実践）を通じた家族支援に注力しています。不安を抱える本人やそのご家族へ、対話を通じた支援モデルの構築を探究しています。

さらに、AI 搭載チャットボットの安全なケア導入やリアルワールドデータ（RWD）活用の政策提言など、臨床現場の「対話」から最先端の「データ実装」まで未来の看護を支える研究を展開しています。



守村 洋

准教授 看護学部（精神保健看護学領域）

MORIMURA Hiroshi

キーワード：メンタルヘルス、自殺予防、シミュレーション教育、精神障害者地域支援

メンタルヘルス、特に自殺予防に関する研究

【研究の概要】“メンタルヘルス”の中でも、自殺予防に関連する研究活動をしています。

- ① 札幌市自殺総合対策；札幌市では自殺対策に取り組む関係団体によるネットワークとして札幌市自殺対策連絡会議を設置しており、その構成員として札幌市自殺総合対策行動計画の推進に寄与しました。また、連絡会議内に設置している学生メンタルヘルス部会の構成員として、他大学との連携も強化しています。
- ② 地域住民に対する講演会活動；札幌市立大学 第504回精神療養講座（8/23）、札幌市立大学 専門セミナー こころの健康講座（3/7）において、「もし死にたいって言われたらどうしますか？」というテーマで講演しました。
- ③ 誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現に向けて、自殺について正しい知識を修得し、他者にできる・自分のための自殺予防を今後も継続していきたいと考えております。



東谷 敬介

特任助教 看護学部（精神保健看護学領域）

AZUMAYA Keisuke

キーワード：精神科リエゾン、認知症ケア、
精神科身体合併症看護、メンタルヘルス

精神科リエゾンに関する研究

【研究の概要】

超高齢化社会を迎え、2025（令和 7）年時点では 65 歳以上人口の総人口に占める割合は 29.4%と過去最高となっています。入院患者さんにおいても、2023（令和 5 年度）年度時点では、75 歳以上の入院患者さんが全体の 57.2%を占めています。また、精神科病院においても、65 歳以上の患者さんは約 65%に達しています。

このような状況のなか、入院を契機とした抑うつ状態や不安、せん妄を含む認知機能の低下をきたす患者さんや、もともと精神疾患があり身体治療を受けながら精神科医療を必要とする患者さんが増加しており、身体・精神の両面に配慮した医療が必要とされています。

精神科リエゾンではこのような患者さんに対して、精神症状の早期発見や介入を行い、患者さんの身体治療の継続や生活の質を維持できるような支援をする役割を担っています。現在は、精神科リエゾン活動の実践内容や、看護職のケアのあり方を整理するとともに、活動の効果を測定する方法などについて明らかにし、患者さんにとって有効なケアモデルの構築につなげていきたいと考えています。



青柳 道子

教授 看護学部（在宅看護学領域）

AOYANAGI Michiko

キーワード：終末期がん患者、看護師、対話力、意思決定支援

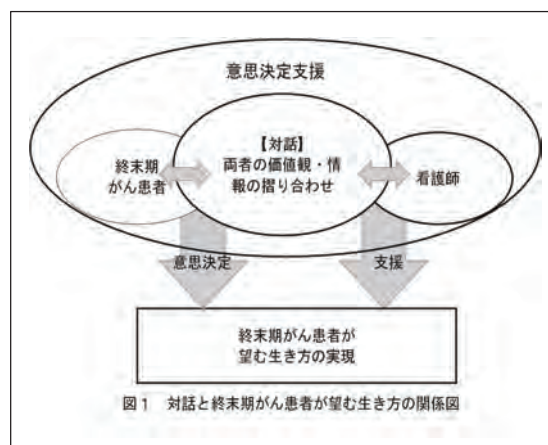
終末期がん患者の望む生き方を支える看護師の対話力獲得過程に関する研究

【研究の概要】

終末期がん患者が残された日々をどこで、どのように過ごすかを決定することは、悔いなく生きるために大変重要です。患者と最も接触する機会が多い看護師は彼らの意思決定を支える役割を担っていますが、その際に必要な対話力の個人差は大きく、十分に役割を果たせていない看護師もいます。しかし、なぜそのような個人差が生じるのかは明らかではありません。そこで本研究では、看護師の対話力がどのように獲得され、その獲得に影響を与える要因は何かを明らかにすることをめざしています。

本研究により対話力の獲得過程と影響要因が明らかになることで、看護師個々の力量にあった教育が可能となり、看護師の対話力の向上を図ることができると考えます。そのことは、終末期がん患者の望む生活の実現に役立つものと思います。

まずは、経験豊富な看護師へのインタビュー調査を行い、それらを分析することで対話力獲得過程の一端を明らかにしていきたいと思っています。



村川 奨

准教授 看護学部（在宅看護学領域）

MURAKAWA Sho

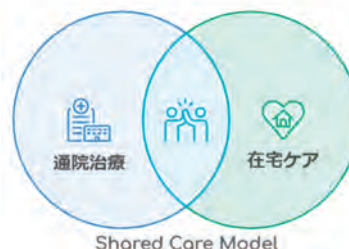
キーワード：在宅看護、がん看護、多職種連携、外来化学療法、Shared Care Model

通院しながら自宅で暮らすがん患者さんを 病院と地域の医療者が一緒に支える仕組みづくり

【研究の概要】

がんの治療技術の進歩により、入院せずに通院で治療を受けながら、自宅で生活する患者さんが年々増えています。通院治療には、自分らしい生活を続けやすいという良さがある一方で、副作用による体調の変化や不安があっても、自宅で十分なケアを受けにくいという課題があります。また、治療を行う病院と地域の医療者の間で患者さんの情報を共有し、途切れなく支える体制も、まだ十分とはいえません。

そこで本研究では、病院と地域の医療者がそれぞれの役割を生かしながら患者さんを支える「Shared Care Model」の開発に取り組んでいます。患者さん、医師、看護師などへの調査をもとに連携の課題を整理し、全国の医療者が参加するオンラインコミュニティを立ち上げ、よりよい連携のあり方を一緒に考えています。調査では、病院の医療者には在宅療養支援の知識、在宅の医療者には治療の知識が不足していることが明らかになっており、連携モデルの開発に加えて、病院と地域の医療者が互いの専門知識を学び合える学習プログラムの開発も進めています。今後は、海外の先進的な取り組みも参考にしながら、病院や訪問看護ステーションで役立つ標準的な支援モデルを作ることを目指しています。



服部 裕子

特任講師 看護学部（在宅看護学領域）

HATTORI Yuko

キーワード：在宅看護、訪問看護、新卒訪問ナース、育成、リロケーション (relocation)、独居高齢者

①新卒（新人）訪問ナース育成支援に関する研究 ②独居高齢者のリロケーション (relocation) に関する研究

【研究の概要】

- ①近年、新卒の訪問看護師の育成の重要性が注目されており、新卒から訪問看護の道に進める支援や成長を後押しする取り組みが全国的にも進められています。一方では、超高齢社会において、地域で活躍する若い訪問看護師を育てていくことが大きな課題となっています。こうした背景から、近郊7大学の在宅看護学の教員が連携し、「ほっかいどう新人訪問ナース教育研究会」を立ち上げ、活動を行っています。本研究会では、新卒訪問ナース同士のつながりづくりや、採用・育成に関する調査研究、新卒訪問ナースの雇用を検討している、あるいはすでに雇用している訪問看護ステーションへの支援や、「新人訪問ナース応援フォーラム」の開催にも取り組んでいます。これらの活動を通して、新卒訪問ナースが活躍できる在宅医療の実現に向け、教育・研究・情報発信の拠点としての役割を果たしていきたいと考えています。
- ②高齢者がよりよく生きるための選択肢の一つとして、リロケーション (relocation) が注目されてきています。独居高齢者にとってのリロケーションの意味、そしてリロケーションがもたらす影響に関する研究に取り組み始めました。高齢者が自分らしく、最期の時まで生き残るための支援につなげていきたいと考えています。



※リロケーション (relocation)：住み慣れた場所から新しい居住環境に移ること

尾立 斗志世

助教 看護学部（在宅看護学領域）

ODACHI Toshiyo

キーワード：訪問看護、難病看護、社会参加、レジリエンス

成人前期に難病を発症した人の社会参加に関するレジリエンスの研究

【研究の概要】

私は 20～30 歳代に難病を発症した人が、難病によって中断された様々な社会参加について、どのように継続したり、再開したり、新たに始めることができるようになったのかに関心を持っています。「難病」とは発病のしくみが明らかでなく、治療法が確立していない、長期の療養を必要とする病気のことを指します。また、本研究では「社会参加」を家族以外の人と関わる機会や趣味や仕事、学習、ボランティア活動など社会とのつながりを持つ活動のことを広く指します。

難病療養者は、病気の発症・治療、症状の悪化、体調の変化、病気の理解が得られにくいことで社会参加を中断せざるを得ないことがあります。しかし、そのような中でも様々な工夫をして社会参加を継続、再開、開始できた難病療養者が「どのようにして社会参加できたのか」を調査しています。この状況を「レジリエンス：逆境から回復する過程」という視点でとらえ、難病療養者が病気に伴う困難を乗り越える過程を明らかにしたいと考えています。

難病療養者がその人らしく生活するために、看護としてどのようなことができるのかを検討しています。

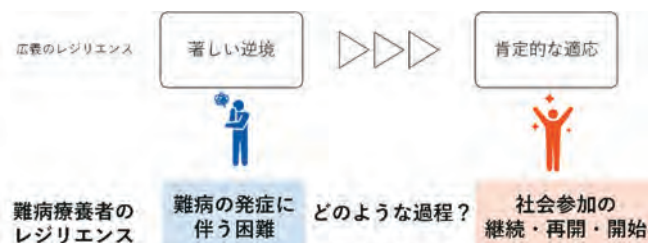


図1 難病療養者のレジリエンス（イメージ図）

上田 泉

教授 看護学部（地域看護学領域）

UEDA Izumi

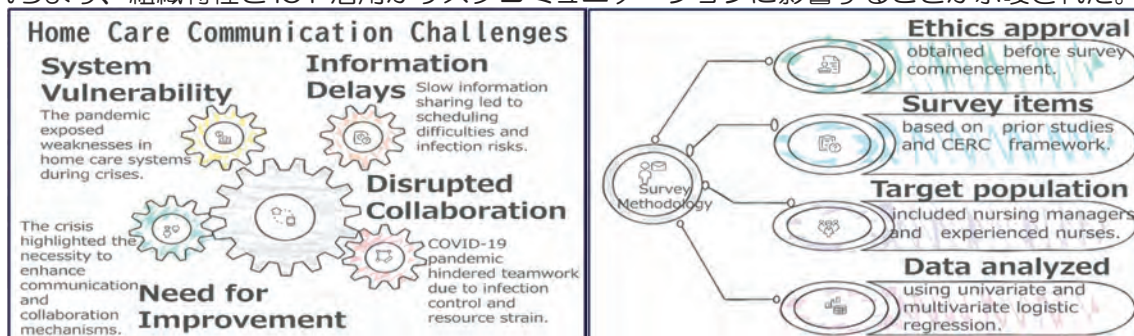
キーワード：リスクコミュニケーション、訪問看護、COVID-19

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下の 訪問看護におけるリスクコミュニケーション

【研究の概要】

在宅ケアでは多職種・多機関が協働してサービスを提供するが、COVID-19 のような未知の災害時には関係機関の増加が混乱を招く可能性がある。本研究は、訪問看護における COVID-19 流行下でのリスクコミュニケーションの実態を明らかにすることを目的とした。A 県内の訪問看護ステーション 588 施設を対象に、管理者と経験 5 年以上の訪問看護師へ無記名自記式質問紙調査を実施し、多変量ロジスティック回帰分析を行った。その結果、「利用者からの訪問拒否」には開設主体、利用者数、スタッフの感染状況、オンラインツール活用が関連し、「過剰業務」には職位、開設主体、開設期間、感染疑い利用者への訪問が関連していた。

これらより、組織特性と ICT 活用がリスクコミュニケーションに影響することが示唆された。



本田 光

教授 看護学部（地域看護学領域）

HONDA Hikaru

キーワード：ソーシャルサポート、社会的孤立・包摂、
地域のつながり

あらゆる世代、健康状態、社会状態にある人々の“つながり”の重要性

【研究の概要】

社会的孤立は公衆衛生の分野において、各国で研究が重ねられており、今や世界的な関心事の一つになっています。例えばイギリスでは孤独担当相が任命され、国策としてこの問題に向き合っています。日本でも、令和5年6月に孤独・孤立対策推進法が公布され、内閣府に対策室が設置、担当大臣も任命されています。

私は、子育て期の母親が地域の中でどのような「つながり」を持っているのか、また、そのつながりの弱さがどのように孤立につながるのかを明らかにする研究に取り組んでいます。特に、母親同士や地域の人々、専門職との関係性に着目し、それらを客観的に把握できる尺度の開発と活用を進めてきました。

この研究は、保健師による家庭訪問や乳幼児健診、子育て支援の現場で活用されることで、「少し気になる」という段階からの関わりを可能にし、孤立の深刻化や児童虐待の予防にもつながると期待されます。誰もが安心して子育てできる地域社会の実現に向けて、科学的根拠に基づいた支援のあり方を提案していきたいと考えています。



市戸 優人

准教授 看護学部（地域看護学領域）

ICHINOHE Yuto

キーワード：性教育、アクティブラーニング、教材開発

包括的性教育の推進に向けた“話し合う性教育”の提案

【研究の概要】

性教育は子どもの性の健康と安全、権利を守るために重要な教育です。しかし、日本では性教育の取り組みが十分に進んでいるとは言えません。海外では人間関係や性の多様性、ジェンダー平等など、幅広いテーマを年代に応じて継続的・体系的に学習する「包括的性教育」が推進されています。この包括的性教育は、安全で健康的で肯定的な関係性を構築するための態度とスキルの形成を重視しており、包括的性教育の実践においては、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を取り入れた教育方法が効果的であると考えます。そこで、現在、包括的性教育を推進する観点から「話し合う性教育」の実践・研究活動に取り組んでいます。

この「話し合う性教育」は、アクティブ・ラーニングを取り入れた参加型の学習であり、思考力・判断力・表現力を身につけることができます。現在は、「話し合う性教育」の効果を検証する研究に取り組むとともに、誰もがアクティブ・ラーニングを取り入れた「話し合う性教育」を実践できるよう「学習環境デザイン」を明らかにする研究も進めています。

今後は、「話し合う性教育」を実施するための指針をつくり、「包括的性教育」の推進への寄与を目指していきたいと考えています。



松村 寛子

特任講師 看護学部（地域看護学領域）

MATSUMURA Hiroko

キーワード：母親、授乳、Hope theory、育児支援

母親の授乳の希望（HOPE）を探る研究

【研究の概要】

本研究は、日本の母親が赤ちゃんに母乳やミルクを与える中で感じる悩みや気持ちについて、ホープ理論（Hope theory）という考え方をもとに検討したものです。育児では母親の考えや状況を大切にする支援が求められており、授乳もその時々に応じて目標や方法を変えていく必要があります。

子育て支援施設を利用する10人の母親にお話をうかがったところ、どの授乳方法でも悩みがあることがわかりました。ミルク中心の母親は孤立感を抱きやすく、母乳中心の母親は喜びとともに負担も感じていました。

授乳の過程で、母親たちは状況に応じて目標（Goals）を見直ししながら、自分に合った方法や支援を選んでいました（Pathways）。評価されることなく安心できる人からの肯定的な言葉や、子どもの成長の実感が授乳のやる気（Agency）につながっていました。

この研究から、授乳は一つの正解ではなく、母親が周囲との関わりの中で柔軟に進めていく過程であり、その気持ちに寄り添う支援の大切さが示されました。



久司 周祐

助教 看護学部（地域看護学領域）

KUJI Shusuke

キーワード：地域づくり、介護予防、健康危機管理、AI

「リーダー一人だけに頼らない、みんなで支え合う」 地域組織における共有型リーダーシップの研究

【研究の概要】

国際的に、ウェルビーイング（心身ともに健やかで自分らしく暮らせること）の基盤となる孤独・孤立対策のため、「地域のつながり」が重視されています。日本でも、2040年に65歳以上の人口が総人口の35%を超えることが予測されており、町内会や老人クラブ、介護予防の「通いの場」といった住民主体の地域組織は、共助の基盤としてますます重要になっています。しかし、社会構造の変化に伴い、地域活動に従事する人は減少し続けており、組織の運営を担うリーダーに負担が集中することで、活動継続が困難になるケースが報告されています。

そこで私は、一人のリーダーに頼る従来型のリーダーシップではなく、役職の有無にかかわらずメンバー全員がリーダーシップを発揮し合う「共有型リーダーシップ」に着目しています。誰もがリーダーシップを流動的に担い、互いに支え合える組織づくりを促すプログラムの開発を目指しています。

リーダーも周囲のメンバーも「自分たちの力で続けていける」と実感できる地域組織の実現により、地域全体のウェルビーイングに貢献したいと考えています。



【画像】住民同士が互いにリーダーシップを発揮することで、地域全体を元気に！

近藤 圭子

助教 看護学部（地域看護学領域）

KONDO Keiko

キーワード：地域医療、高齢者の健康、自己効力感、健康行動、QOL

地域医療と高齢者の健康支援に関する研究

【研究の概要】

人口減少や高齢化が進む地域では、医療資源や生活環境の変化により、高齢者の健康や生活にさまざまな影響が生じています。私は、地域で暮らす高齢者を対象に、健康行動や自己効力感、QOL（生活の質）に着目し、高齢者一人ひとりの強みや地域とのつながりを活かしながら、地域で安心して生活をするために必要な支援について研究しています。

これまで、過疎地域や小規模自治体に居住する高齢者を対象として、健康状態だけでなく、医療へのアクセス、日常生活への思い、地域とのつながり、将来への不安などについて調査を行ってきました。また、地域医療やデジタル化の進展が高齢者の生活や健康行動に与える影響についての研究にも取り組んでいます。

さらに、地域活動や人とのつながりと健康との関連にも関心を持ち、コミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する研究にも取り組んでいます。研究を通して、地域の特性や住民の視点を踏まえながら、高齢者が地域で安心して生活をするための支援について検討しています。



3. AIT センター

高橋 尚人

教授 AIT センター

TAKAHSHI Naoto

キーワード：深層学習、物体検出、物体追跡

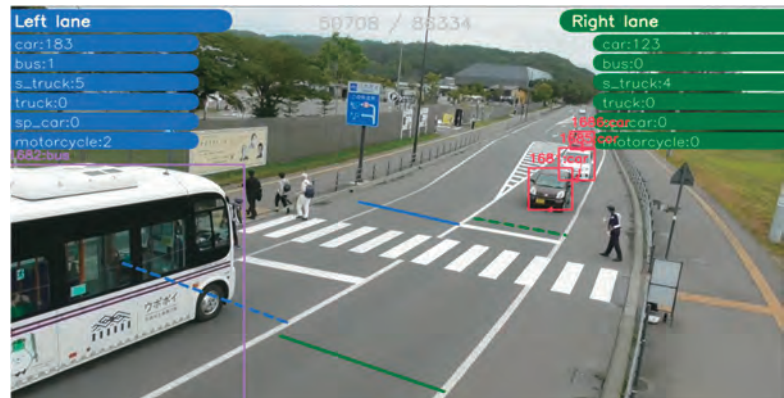
物体検出・物体追跡技術を用いた交通量調査プログラムの開発

【研究の概要】

交通量調査は、道路の計画や設計、管理等における最も基本的な調査事項である。従来の調査手法として、調査地点の交通状況が直接視認できる場所に調査員を配置し、数取機によって車両台数を計測する人手観測があるが、調査の特性上、調査員の確保が困難な状況である。

本研究では、交通量調査の省力化・省人化を目指し、ビデオ画像を処理することで交通量を計測するプログラムの開発に取り組んだ。当該プログラムは、検出した車両を物体追跡技術で追跡し、画像上に設置した計測線を跨いだ場合に台数をカウントする。単路では90%以上の精度で車両台数を計測できる。

さらに、交差点部で右折車・直進車など方向別の交通量計測を行うため、複数計測線を設けて「計測線Aを跨ぎ、かつ、計測線Bを跨いだ場合」にカウントする仕組みを構築した。



交通量調査プログラムの出力例

津田 一郎

特任教授 AIT センター

TSUDA Ichiro

キーワード：複雑系、カオス、ニューラルネット、脳、応用数学

カオス力学を基軸にした複雑系脳科学の研究

【研究の概要】

私の研究の目的は、脳科学の数学的諸原理を明らかにし、その成果を医療などに役立てることです。カオスやフラクタルなどの複雑系科学の考えに基づいて研究しています。

人々が日常の経験を覚えることができるのは海馬という脳領域を経由してエピソード記憶が形成されるからです。図はエピソードからエピソードへのカオス的な遷移を表したものです。一見ランダムに見えますが、遷移規則が隠れています。現代の生成系 AI の基盤を作っている人工ニューラルネットの Transformer に採用されている attention 機構は、重みの高いパタンへの遷移を起こす静的なものですが、本研究で使用したニューラルネットは、記憶パタン間の自律的遷移を実現します。さらに最近、本研究をもとに AI の一種であるリザバー計算機を使って脳の様々な機能分化の研究をしています。脳を構成するニューラルネットのつながりがどの程度切れると記憶のダイナミクスが無くなるか、また幻覚を生じるかの研究もしています。

記憶間のカオス遍歴 (Scholarpedia:

Chaotic Itinerancy より。

[http://www.scholarpedia.org/article/](http://www.scholarpedia.org/article/Chaotic_itinerancy)

Chaotic_itinerancy ©Ichiro Tsuda)



橋田 浩一

特任教授 AIT センター

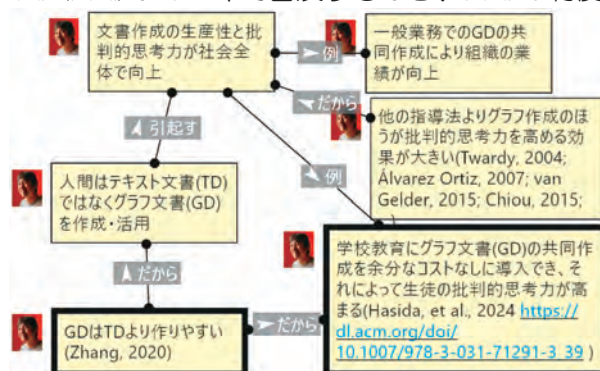
HASIDA Koiti

キーワード：パーソナル AI、知識グラフ、グラフ文書

パーソナル AI と知識グラフ

【研究の概要】

利用者と少し会話してそのニーズを満たすサービスを選んで実行してくれる AI エージェント (AIA) は既存の技術で実現できる。そのような AIA はさまざまな仲介業務を自動化することで巨大な市場を生む。したがって AIA は 10 年で普及するだろう。人間は他のアプリや Web サイトをいじる必要がなくなり、デジタルデバイドも解消する。さらに、欧州の法律によって、AIA の入出力データを利用者が自由に使えるように AIA が作られている (AIA がパーソナル AI である) 必要があり、その規制は全世界に広がる。つまりパーソナル AI (PAI) が 10 年で普及するから、PAI の利便性を高めリスクを低減する必要がある。また、PAI は知識グラフを用いて AI の幻覚を防ぎ精度を高めるが、その方法はほとんどの実用的 AI システムに適用できる。一方、人間が右図のような知識グラフとして文書を作ることで、文書作成の効率と論理的思考力が高まる。このような知識グラフを使えば PAI を含む AI システムの性能も向上するから、文書が知識グラフになり AI の性能が高まることにより、社会全体の生産性が大幅に向上する。そんな社会を実現するための研究を進めている。



高橋 茶子

准教授 AIT センター

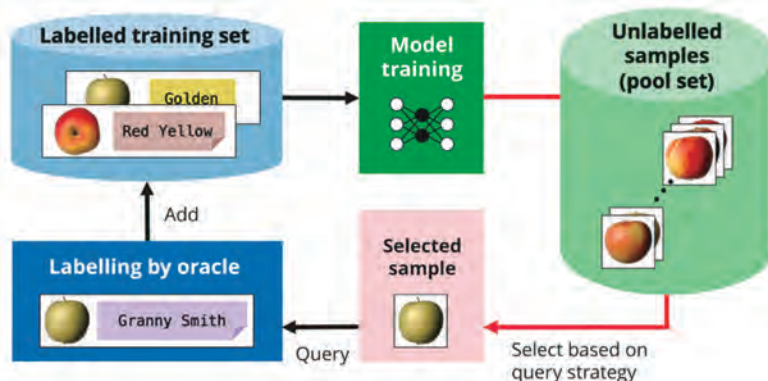
TAKAHASHI Chako

キーワード：能動学習、スモールデータ機械学習

もっと楽しよう！ 少ない「答え」で賢く学ぶ「能動学習」の効率化

【研究の概要】

機械学習モデルの訓練には、「画像」と「その画像が何であるかという答え（ラベル）」の組が必要です。例えば、りんごの品種を判別するモデルでは、人間が画像一つ一つに「これは王林」「これはふじ」と名前を付ける必要があります。この作業には大きなコストがかかります。能動学習は、大量の未ラベル画像の中から、性能向上に役立つようなデータを優先的に選んでラベルを付けることで、少ないラベル付きデータでも効率的に高性能なモデルを作る手法です。「役立つようなデータ」の選び方として、モデルの将来の予測誤差（予測と正解のズレ）を小さくするデータを選ぶ方法が有効であると知られていますが、計算量が大きく実務的にはあまり用いられてきませんでした。本研究ではこの方法の計算対象を、モデルが特に判断に迷うデータだけに事前に絞り込むことで、計算時間だけでなく、一定の性能を達成するまでに必要なラベル数も削減できることを示しました。[C. Takahashi & T. Sato, CCIS 2170, 244-255 (2024)]



岡崎 昌太

助教 AIT センター

OKAZAKI Shota

キーワード：AI、深層学習、画像認識、大規模言語モデル、医用システム

人工知能によるヘルスケア分野への応用研究

【研究の概要】

近年、人工知能（AI）はさまざまな分野への応用が急速に広がっており、なかでも深層学習は画像認識において卓越した性能を発揮しています。本研究では、深層学習技術を活用し、エックス線画像やMRIといった医用画像から疾患の検出や生体情報を取得することで、診断支援への応用を進めています。

加えて、生成AIの一種である大規模言語モデル（LLM）のヘルスケア分野への応用にも取り組んでいます。LLMを活用した情報提供支援により、医療従事者や患者が必要な情報へ適切かつ迅速にアクセスできる仕組みの構築に取り組んでいます。

これらの研究を通じて、医療の質の向上と、誰もが適切な医療を受けられる環境の実現を目指しています。



札幌市立大学 教員研究紹介 2026

編 集 札幌市立大学研究支援地域連携センター

発行日 2026（令和 8）年 7 月 15 日

発 行 札幌市立大学研究支援地域連携センター

〒005-0864 札幌市南区芸術の森 1 丁目

TEL.011-592-2346

FAX.011-592-2369

<http://www.scu.ac.jp>

E-mail:crc@scu.ac.jp



札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY